

大宰府条坊跡

第86次発掘調査

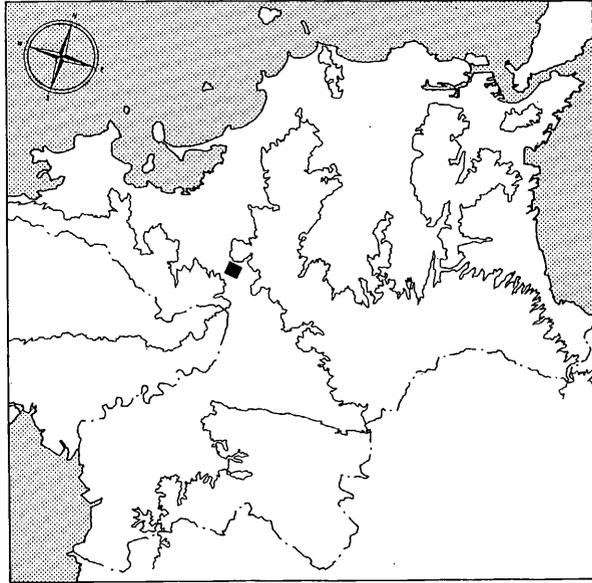
筑紫野市文化財調査報告書

第 27 集

1 9 9 1

筑紫野市教育委員会

だざいふじょうぼうし
大宰府 条 坊 跡



序

この報告書は、大宰府条坊跡郭内に所在する遺跡の発掘調査の記録です。

今回の調査地は、大宰府条坊跡郭内の西南部にあたり、大宰府関連の時期の遺構が多数発見されました。

さて、当市は福岡市・久留米市のほぼ中間にあり、往古より交通・経済・流通の要所として発展して来ています。現在の大宰府条坊跡は大宰府市・筑紫野両市の市街地として大宰府政庁繁栄後も、二日市の市場町・太宰府天満宮参拝の昇降地としても、発展をし住宅建設も早い地域でした。

それでも、農業を営む豊かな水田も多く、自然も残していましたが、近年の宅地・マンションブームは、市街地の農地にまで押しよせてまいりました。今回の調査は近年の当市でも多くなりつつある市街地の集合住宅建設に伴う発掘調査の一つです。

今回の調査において多量の遺物が出土し、重要な資料も少なくありません。本書では、これらの成果について十分な報告ができませんでしたが、学術文化の向上に少しでも役立てば幸いです。

なお、調査にあたり、かなりの重労働でもあったにもかかわらず、黙々と発掘に従事して下さった作業員の皆様方に心から御礼申し上げます。

平成3年3月30日

筑紫野市教育委員会

教育長 永 渕 正 敏

例 言

1. この報告書は、筑紫野市大宇塔原466番地の1・466番地の6に所在する大宰府条坊跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、渡邊ハルヨ氏の委託を受け、筑紫野市教育委員会が実施した。
3. 現場での実測、写真撮影は山野洋一が行った。
4. 遺物の実測は森部順子が行い、写真は山野、向田雅彦が行った。
5. 製図は森田くみ子が行い、遺物の拓本は竹田スミ子、山野が行った。
6. 挿図中の北は磁北を示す。
7. 本書の執筆、編集は山野が行った。

本文目次

	頁
I. 調査の経過と組織	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 発掘調査の組織	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
遺構	4
a 掘出建物跡 (S B)	4
b 遺物	8
a 土壌 (S K)	10
b 遺物	11
井戸 (S E)	14
a) 検出遺構	14
b) 出土遺物	16
c その他の遺構 (S X)	21
b 出土遺物	22
その他の出土遺物	22
a 溝状遺構 (S D)	22
b 遺物	23
IV. まとめ	23
V. 付編	24

図 版 目 次

	本文対照頁
P L 1. (1)調査地より政庁を望む (気球)	3
(2)調査地全景 (気球)	折り込み
P L 2. (1)調査地全景 (東半部・気球)	折り込み
(2)調査地全景 (西半部・気球)	折り込み
P L 3. (1)S K 01 (南より)	10
(2)S K 02 (南より)	10
(3)S K 03 (東より)	11
P L 4. (1)S E 01 (北より・気球)	15
(2)S E 01近景 (北より)	15
P L 5. (1)S E 02 (北西より)	16
(2)S E 02遺物出土状況	16
P L 6. (1)S E 02遺物出土状況	16
(2)S E 02底部の状況	16
P L 7. (1)S X 01 (西より)	21
(2)発掘調査風景 (東半部)	折り込み
P L 8. S B・S K 01出土遺物	9・12
P L 9. S K 02・03出土遺物	12・13
P L 10. S E 01出土遺物(1)	17
P L 11. S E 01出土遺物(2)	18
P L 12. S E 01出土遺物(3)	20
P L 13. S E 02・S X 01出土遺物	20・21
P L 14. 古銭・墨書土器・資料紹介土器	22・24

挿 図 目 次

本文対照頁

F i g - 1	遺跡付近地形図 (S = 1 / 5,000)	2
F i g - 2	周辺の遺跡分布図 (S = 1 / 25,000)	3
F i g - 3	遺構配置図 (S = 1 / 120)	折り込み
F i g - 4	S B01実測図 (S = 1 / 80)	4
F i g - 5	S B02実測図 (S = 1 / 80)	5
F i g - 6	S B03実測図 (S = 1 / 80)	5
F i g - 7	S B04実測図 (S = 1 / 80)	6
F i g - 8	S B05実測図 (S = 1 / 80)	7
F i g - 9	S B06実測図 (S = 1 / 80)	8
F i g -10	S B07実測図 (S = 1 / 80)	8
F i g -11	S B08実測図 (S = 1 / 80)	9
F i g -12	S B09実測図 (S = 1 / 80)	9
F i g -13	S B04・05・06出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	9
F i g -14	S K01実測図 (S = 1 / 60)	10
F i g -15	S K02実測図 (S = 1 / 60)	10
F i g -16	S K03実測図 (S = 1 / 60)	11
F i g -17	S K04実測図 (S = 1 / 60)	11
F i g -18	S K05実測図 (S = 1 / 60)	11
F i g -19	S K06実測図 (S = 1 / 60)	11
F i g -20	S K01出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	12
F i g -21	S K02出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	13
F i g -22	S E01実測図 (S = 1 / 30)	15
F i g -23	S E02実測図 (S = 1 / 30)	16
F i g -24	S E01出土遺物実測図① (S = 1 / 3)	17
F i g -25	S E01出土遺物実測図② (S = 1 / 3・1 / 5)	18
F i g -26	S E02出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	20
F i g -27	S X01実測図 (S = 1 / 20)	21
F i g -28	S X01出土遺物実測図 (S = 1 / 5)	21
F i g -29	墨書土器実測図 (S = 1 / 3)	22
F i g -30	S D01~06断面図 (S = 1 / 20)	23
F i g -31	壺形土器実測図 (S = 1 / 3)	24

I 調査の経過と組織

1 調査にいたる経過

昭和63年10月28日、筑紫野市教育委員会へ市内大宇塔原660番地の2在住の渡邊ハルヨ氏より、市内大宇塔原466-6、同466-7に宅地造成を計画中である旨の埋蔵文化財の有無の確認のための試掘依頼がなされた。

当該地が大宰府条坊跡の内に入ることから、昭和63年11月15日、バックホーにより遺構面の観察を実施し、掘立建物跡・土壇・溝状遺構を検出した。

その後、遺跡保護についての協議を再三にわたり実施した。その結果、比較的遺構量の少なかった南西側（大宇塔原466の1及び466-6）に計画を変更することで協議を終えていた。平成元年10月21日、本市都市計画課へ都市計画法第32条による本申請が提出された。また、あい前後して、文化財保護法57条の2第1項の届出が提出された。

同年10月23日、申請者に試掘結果をふまえて、周知の遺跡が所在し事前に発掘調査の必要性を通知した。

その後、再度申請者と文化財の保存の協力について協議を行い、建設の意志の強いことから発掘調査について、平成2年1月9日、埋蔵文化財発掘調査の委託契約を申請者と市長との間で締結した。平成2年1月17日、文化財保護法第98条の2第1項の通知を交化庁へ行き、同年2月26日より現地調査に入り、同年5月24日をもって終了した。

また、整理および報告書作成の作業を平成元年・2年度にわたって実施した。

2 発掘調査の組織

総括	筑紫野市教育委員会	教育長	永淵正敏
庶務	筑紫野市教育委員会	社会教育課	課長 川原孝之
	筑紫野市教育委員会	社会教育課	文化財係 係長 山野洋一
	筑紫野市教育委員会	社会教育課	文化財係（臨時） 熊谷康子
発掘調査	筑紫野市教育委員会	社会教育課	文化財係 係長 山野洋一
	筑紫野市教育委員会	社会教育課	文化財係 主事 奥村俊久（試掘）

現場作業員は次のとおりです。

柴田義雄・鬼木寅雄・梶山サツキ・香月 巧・志田暁子・音藤丹宮蔵・山田久繁・日高登志子・日永田正彦・松田正樹・松田 運・鬼木正俊・市川大助・市川義弘・鬼木太美男・鬼木マサノ・市川ユキ子

室内整理・報告作業については、次のとおりです。

室内整理補助員 森部順子・森田くみ子

室内整理作業員 村上喜代・井上惇子・竹田スミ子・大平繁子・林田由美

発掘調査中、工事施行者の上村建設株式会社の方々には、現地について色々の協力を得た。

また、調査には福岡県教育委員会文化課長補佐石松好雄氏、九州歴史資料館調査課長栗原和彦氏、太宰府市教育委員会社会教育課文化財係技師狭川真一氏ほか貴重な助言を得た。遺物についても同様であり、他に九州歴史資料館参事補佐橋口達也氏、同館参事補佐横田義章に多大なるご指導・ご助言をいただいた。ここに記して感謝する次第です。

II 位置と環境

(Fig-1・2)

今回の調査地は大宰府跡の郭内にあり、市域の北部にあたり、太宰府市に堺を接する。この大宰府跡は筑紫野平野の北西部にあたり、南西より背振山塊が、北東から三郡山塊がせまっている。これらの山に囲まれた平野は、細長く北西に南東に、それぞれ広がり御笠川は博多湾へ、宝満川は筑後平野を潤し有明海へ注いでいる。

その平野部の要ともいべき所に太宰府市、筑紫野両市にまたがり、平野部を東西に各12坊(約2.6km)、南北22条(約2.4km)に区画された条坊跡が施行されたと推定され、大宰府跡は7世紀後半以降、西海道九国三島の政治・経済的中心地として歴史に登場する。

条坊の周辺には、大宰府の防衛上の施設として、北に大野城跡、南に基肆城跡(ともに朝鮮式山城として名高い)、北西に博多側からの侵攻を防ぐ水城跡が配されている。

また、その北辺には大宰府政庁跡、学校院跡、観世音寺跡および子院跡が位置し、その北部郭外に、筑前国国分寺跡、国分尼寺跡、国分瓦窯跡がある。一方郭内には般若寺跡、菅原道具の幽閉の地で知られる榎寺跡、などがあり、その南辺の郭外に三段割り込みの心礎を残す塔原廃寺、その南に武蔵寺跡などがつらなる。

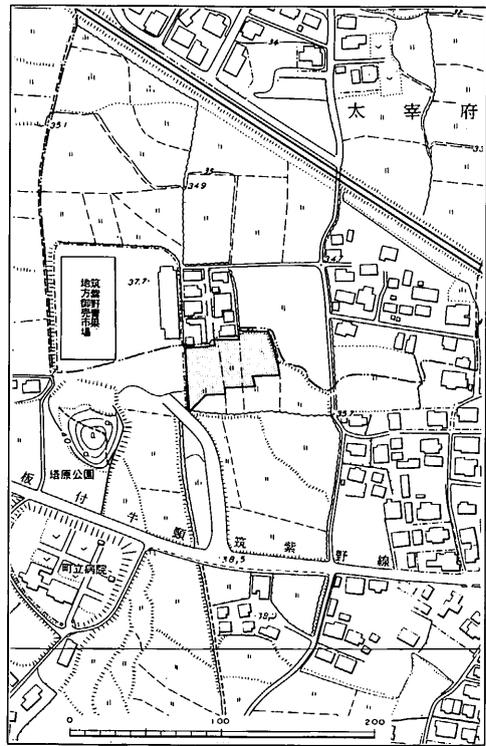


Fig-1 遺跡付近地形図 (S=1/5,000)

現在この条坊跡周辺は開発のあおりを直接に受け、往時をしのぶ事はむずかしい。なお、調査地は条坊跡鏡山^{註①}(案)によれば、右郭18条5坊の中におさまると考えられる。

註① 鏡山 猛 「大宰府都城の研究」 昭和43年

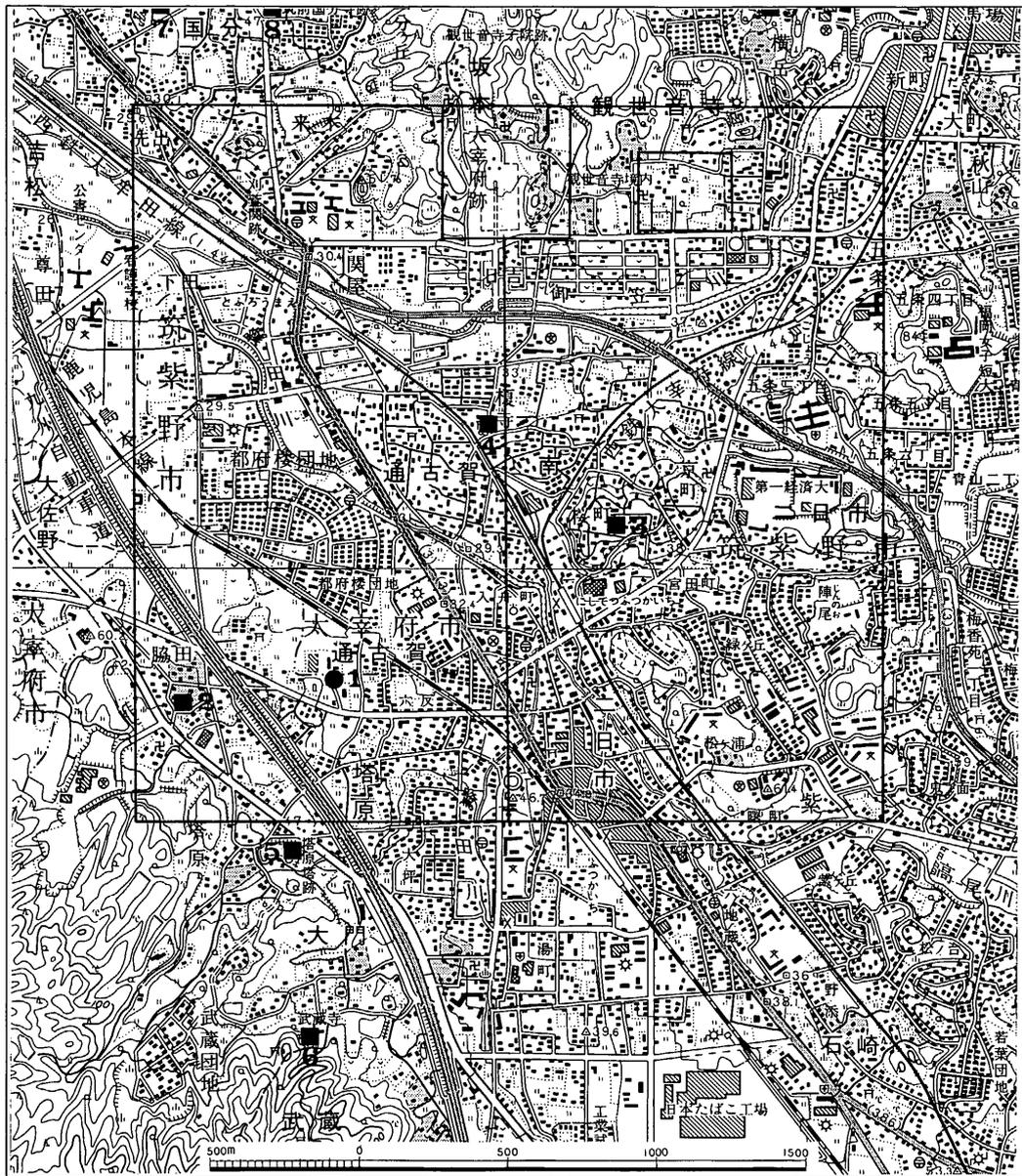


Fig-2 周辺の遺跡分布図 (S = 1 / 25,000)

1. 調査地
2. 杉塚廃寺
3. 般若寺跡
4. 櫻寺
5. 塔原廃寺
6. 武蔵寺
7. 筑前国分寺
8. 筑前国分尼寺跡
9. 崇福寺

III 調査の記録

a) 検出遺構 (Fig-3、PL-1・2)

大宰府条坊第86次調査地点は筑紫野市大字塔原466-1・466-6に所在する。また、同地は大宰府条坊右郭18条5坊の中に位置している。現況は標高35mの水田である。調査は開発申請による建物部分を対象としてFig-3のごとく調査区を設定して調査を行い、面積は約540㎡である。調査区は東西に長い形となり、西に向うにつれて標高は約40~50cm高くなり、水田の耕作土を削土するとすぐに遺構面が検出された。

調査による主な検出遺構は掘立建物(SB)9棟・土塋(SK)5基・井戸(SE)2基・溝状遺構(SD)5状・その他不明遺構(SX)1であり、その他に遺物を含んだピットは約280を数え、その中には柱痕を残すものもいくつかあり、何棟かの建物があるものと考えられる。

掘立建物跡(SB)

a) 検出遺構

建物跡9棟全てが掘立式で、また側柱形式で、東西棟2、南北棟7(そのうち2棟は不明であるが一応この中に入れた。)であるが、他にも多数の柱穴があるものの建物としての検出はできず、調査区域外にも含めると何棟かのものが建つものと思われる。

SB01 (Fig-4)

調査区の東隅にあり、すぐ西にSB-04、南にSB-02・04がある。さて、建物は3間×2間の南北棟建物で桁行総長は西柱列で310cm、東柱列で300cm、梁行総長は北妻で190cm、南妻で200cmとほぼ方形である。柱穴の形状は、ほぼ隅丸方形であり、その径は30~40cmで、残存深さは東側の1個を除くと40~60cmを測る。6個の柱穴の中より須恵器、土師器の少片が入っていた。なお、主軸はN-10.5°-Eである。

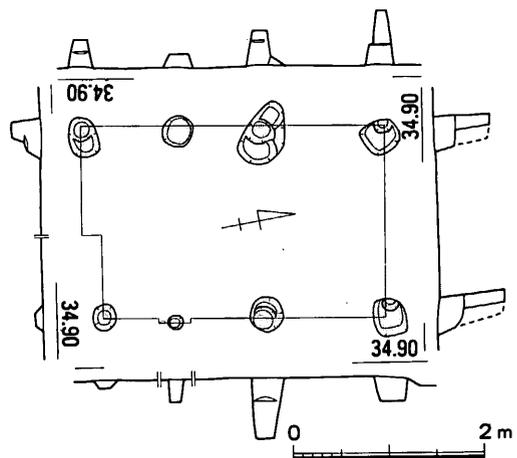


Fig-4 SB-01実測図(縮尺1/80)

SB-02 (Fig-5)

南側を調査区で切られ全体は確認されなかったが、3間以上×3間の南北棟建物で桁行総長は西柱列で580cm以上、東柱列で560cm以上、又、梁行総長は北妻で420cmなお、南妻は未掘で

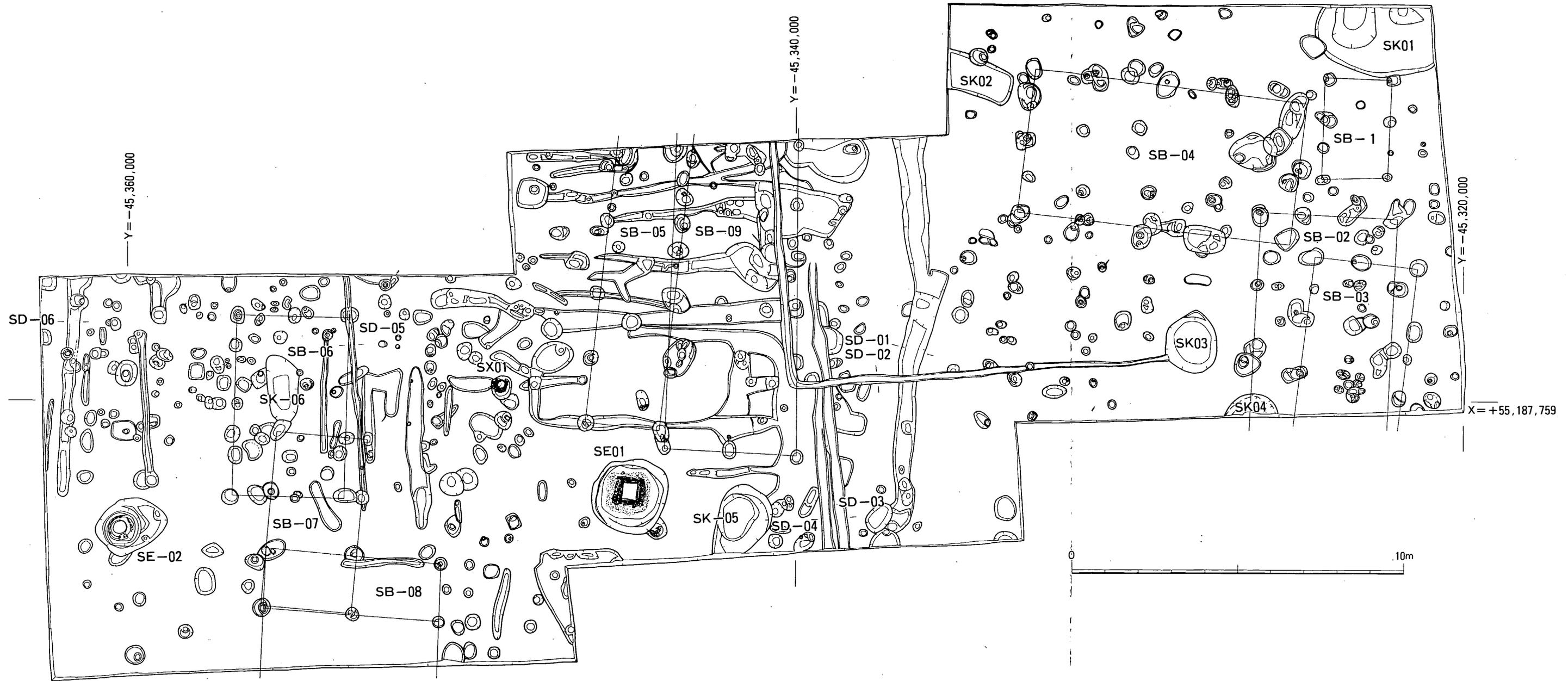


Fig-3 遺構配置図 (縮尺 1/120)

あり不明である。平面形は方形である。

柱穴の形状は円形または略方形であり50~70cmを測り、残存深さは40~60cmであり、全んどの柱穴より須恵器・土師器にまじり平瓦の少片が検出された。なお、主軸はN-9.5°-Eを示す。

SB-03 (Fig-6)

東西の2面を調査区により未掘のための不明な点が多いが、2間以上×2間以上の建物で、東西に延びる可能性をもつ。

一応、西側柱列長は440 Fig-5 SB-02実測図 (縮尺1/80)

cm、北側柱列長は420cmを測る。

柱穴は平面形は隅丸方形で50~70cmで、残存深さは40~60cmを測り、4個の柱穴からは、柱の木片が残っていた。又、土器の小片(坏身・蓋・甑のつまみ)が検出された。主軸はN-11.5°-Eである。

SB-04 (Fig-7)

4間×2間の東西棟建物で、主軸方向はN-76.5°-Wを示す。桁行総長は北柱列で810cm・南柱列で810cm、又、梁行総長は東妻で410cm、西妻で450cmとほぼ方形である。柱穴の形状は円または楕円形で、その径は30~70cmと幅

がある。残存深さは40~60cmであり、柱穴の底に石を置いて根締めとしたものも見うけられる。

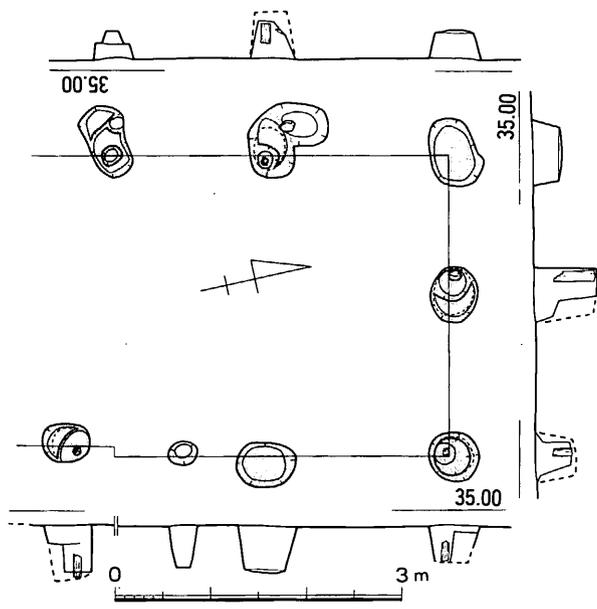
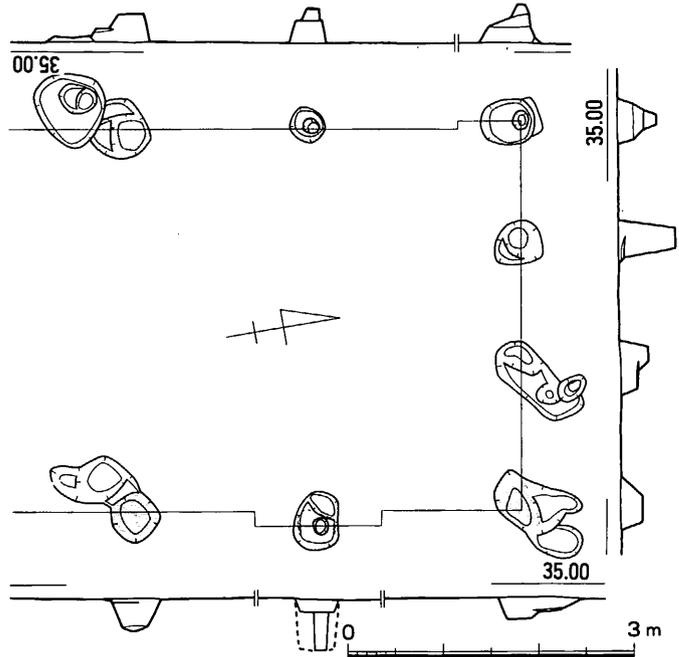


Fig-6 SB-03実測図 (縮尺1/80)

この建物は今調査で最大であり面積は約37.5㎡を測る。全んどの柱穴の埋土により甕・坏・蓋・墨書土器などの土器片が多数検出された。

SB-05 (Fig-8)

北側は調査区により切られ延びる可能性をもつ、1間×4間以上の南北棟建物で桁行総長は西柱列で1,050cm以上、東柱列で1,100cm以上、又、梁行総長は南妻で約230~240cmである。北妻は不明である。平面形はややいびつなものの、ほぼ長方形である。柱穴はほぼ円形を呈し、40~50cmを測り、深さは40cm前後である。南側の柱穴底面に陶片(塙の破片を転用している)を敷いている。又、柱穴埋土より土師器、須恵器の小片が出土している。主軸はN-13°-Eである。

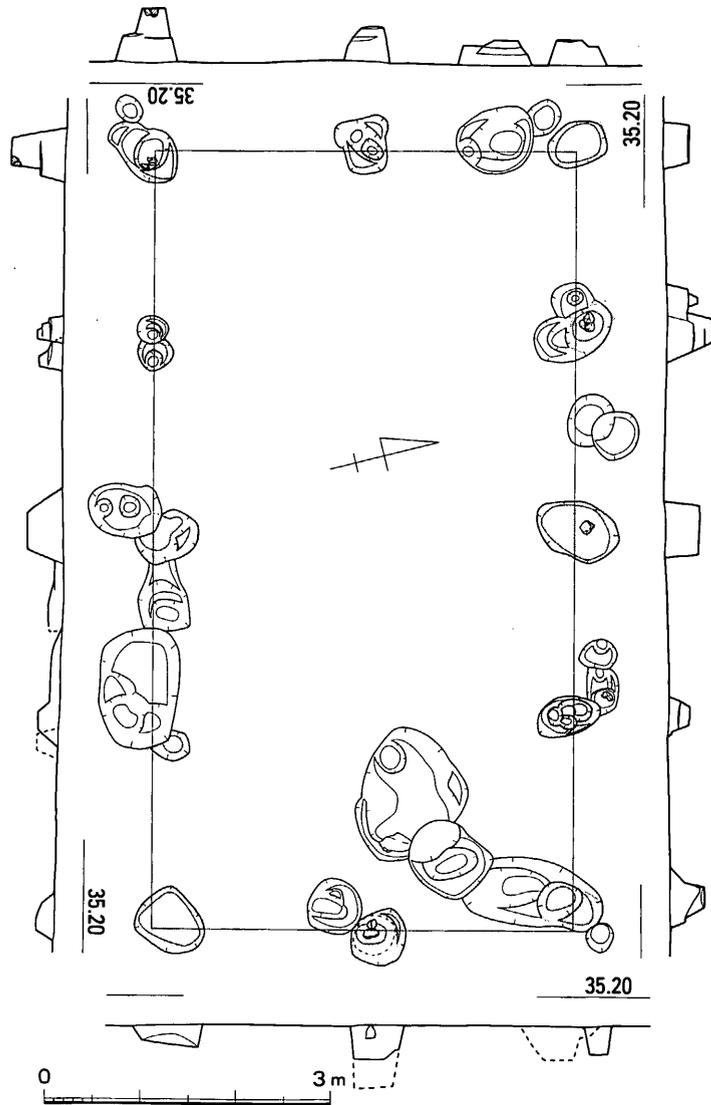


Fig-7 SB-04実測図 (縮尺1/80)

SB-06 (Fig-9)

2間×3間の南北棟建物で主軸はN-7.5°-Eを示し、桁行総長は東・西柱列ともほぼ560cmを測る。梁行総長も南・北妻で約340cmを測り、平面形は方形である。柱穴は円形又は略方形とバラツキはあり、その径も30~50cmである。残存する深さは、30cm前後である。

なお、西側桁で、1個の柱穴は検出できなかった。遺物は柱穴より須恵器・土師器・瓦片を少量検出した。

SB-07 (Fig-10)

北部をSB-06に重なる1間×3間の南北棟建物である。主軸はN-11°-Eを示す。

桁行総長を見ると、東・西柱列とも540~550cmの中におさまり、梁行総長は南・北妻ともに270cmを測り、その平面形はほぼ方形である。

柱穴は40~80cmと円形又は楕円形と不整いである。残存する深さは30~40cmで、8個の柱穴のうち4個は7~8cmの扁平な石または陶片を敷いている。遺物は少ない。

SB-08 (Fig-11)

SB-07と北西辺を重複し南側を調査区に切られた建物で2間×1間以上の東西棟建物と思われる。又は、柱穴敷石の関係から見ると1×2間の建物とも考えられる。総柱間長は西側で360cm以上、北妻で530cm、東側で300cm以上を測る。柱形は円形又は楕円形を示す。

残存する深さは約30cm前後である。主軸はN-78.5°-Wである。

SB-09 (Fig-12)

西側をSB-05と重なり、北辺を調査区によって完掘はできなかったが、2間×5間以上の南北棟建物で、桁行総長は西柱列で930cm以上、東柱列で980cm以上、また、梁行総長は北妻は不明であるが、南妻は400cmを測る。柱穴は円形又は方形とバラツキがあり、その径は40~60cm、残存深さは40~60cmである。主軸はN-9°-Eを示す。建物は方形を示すものの、東西方向にややいびつになる。柱穴より土器片が少量出土している。

b) 遺物

SB-04出土遺物 (Fig-13 PL8)

須恵器

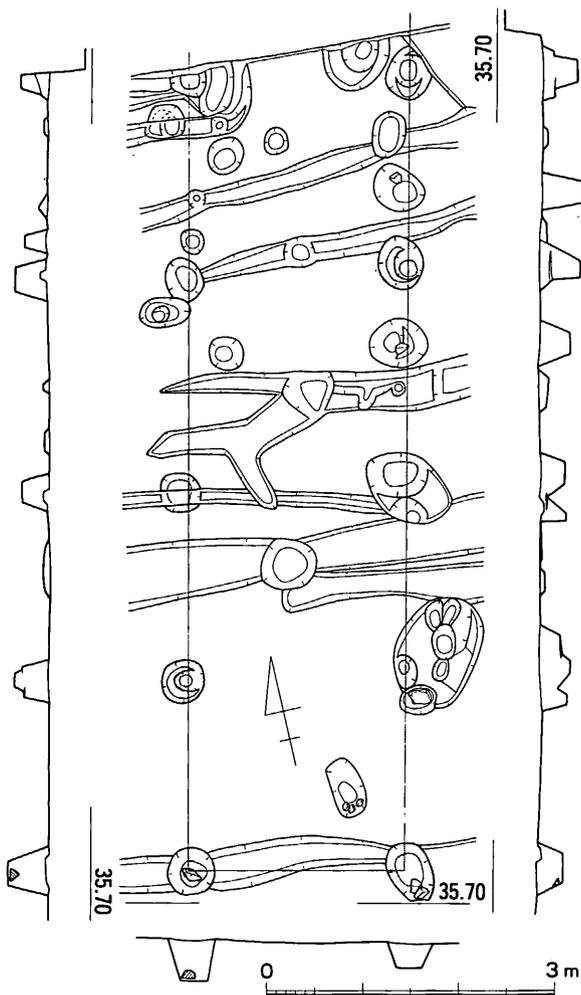


Fig-8 SB05実測図 (縮尺1/80)

坏 1. 少片で
あり復元値は口径
13.8 cm器高4.6cm、
底部径9.3cmを測
る。内外面に煤が
付着する。

蓋 2. つまみ
をもつ蓋の破片で
あり、表面に、同
心円に縦線を引い
た様に見える墨書
が施されている。
焼成は良好である。

**S B - 05 出土遺
物 (F i g - 13
P L - 8)**

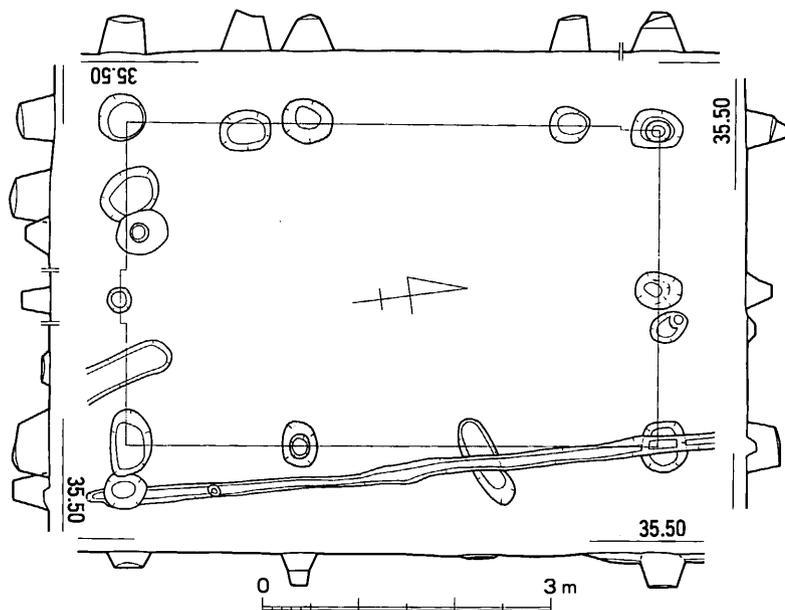


Fig-9 S B06実測図 (縮尺 1/80)

罫 3は素面の方形
を呈す罫の破片であり、
内側に釘孔が見える、
現存する厚みは6cm、
側辺は13cmと11.5cmで
ある、胎土は粗い。
方罫であろうか。

**S B - 06 出土遺物
(F i g - 13)
土師器**

椀 4は小片のため
寸法はつかめないが、
高台は短く、外傾して
とりつけられている。体部は丸みを有する。内外とも丁寧なヨコナデをしている。外面に一部、
煤が付着している。

土壌 (S K)

a) 検出遺構

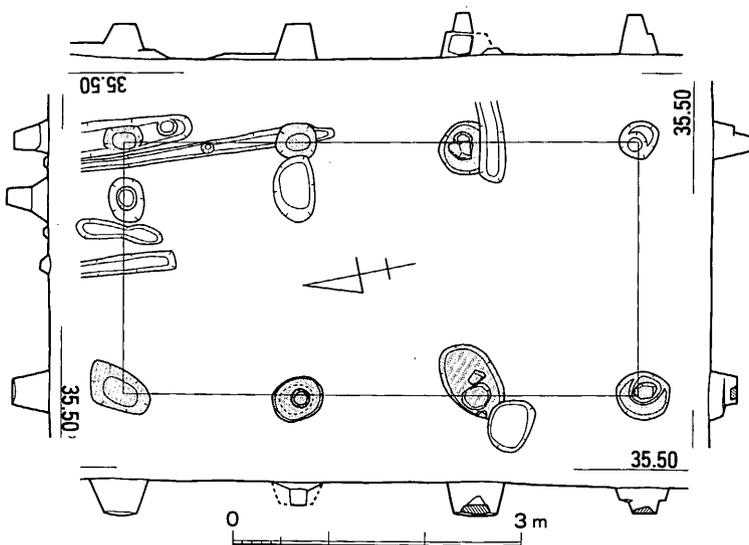


Fig-10 S B07実測図 (縮尺 1/80)

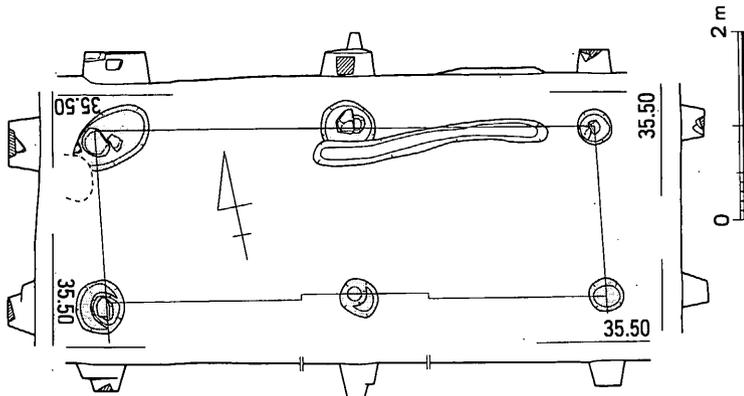


Fig-11 S B08実測図 (縮尺 1/80)

調査によって大小6基の土壇を検出したが、そのうち4基は調査区により切られ全ぼうは不明であった。形状も円形から方形・不整形とまちまちであり、遺物についても小片をかなり含むものから、

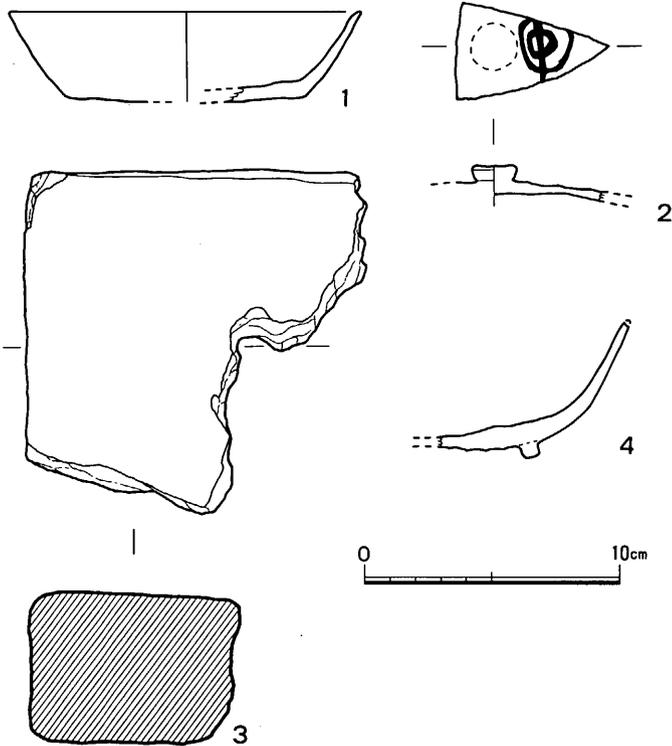


Fig-13 S B04・05・06出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

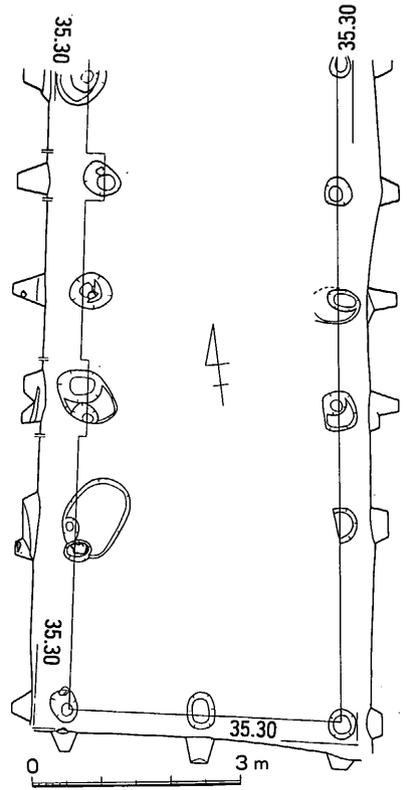


Fig-12 S B09実測図 (縮尺 1/80)

含くまないものまでバラエティーにとんでいた。

SK-01 (Fig-14 PL-3)

調査区の北東区に位置し2辺を切られ全体形はつかめなかったが、楕円形に近い不整形と考えられ、現存する寸法は長径350cm、短径200cmを測る。底面に2ヶ所のゆるやかなくぼみを有し、全体的には浅い皿状を呈するものであり、出土遺物は坏・蓋・甕・皿など多様な須恵器・土師器の小片が多数出土した。

SK-02 (Fig-15 PL-3)

西側を調査区に切られ全形は判然としないが、ほぼ方形を示すものと思われる。主軸をN-63°-Wにとり上部で短辺100cm、長辺200cmを測り、底部はほぼフラットで現存する深さは45cmを測る。埋土は黒色の少砂粒を含む粘質土で、上半部より土器の出土を見た。

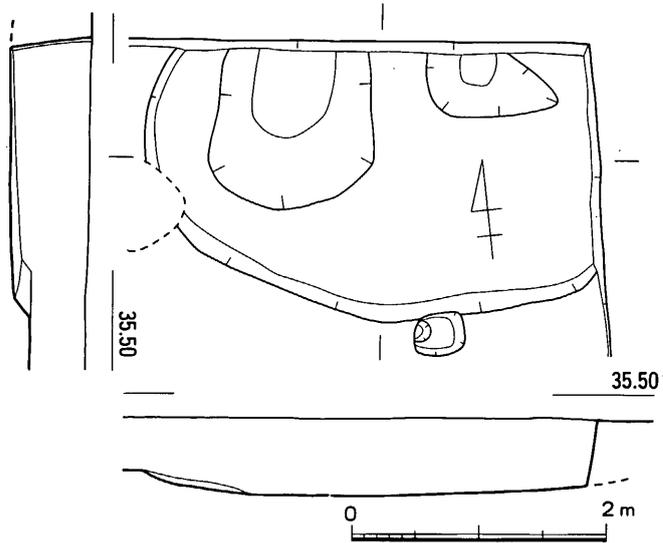


Fig-14 SK01実測図 (縮尺1/60)

SK-03 (Fig-16, PL-3)

SD-02により西側を切られる。190×160cmの略円形を示し北側に三ヶ月状の段を有し、深さ34cmで、逆台形の断面を示し、底部はフラットである。遺物は須恵器(蓋・甕)土師器片が出土した。

SK-04 (Fig-17)

調査区により南側は切られ全体は判然としないが、径160cm程の円形のものであり、断面は2稜を有し摺鉢状を呈する。出土遺物は甕・坏・壺など多器種の須恵器、土師器片が出土しているが、ローリングがはげしい。

SK-05 (Fig-18)

南側を調査区により切られるものの、230×160cmを測り南北に主軸N-27°-Eを示す不整形の土壌である。底部は90×130cmの不整形でフラットであり、壁体に2稜を有する。

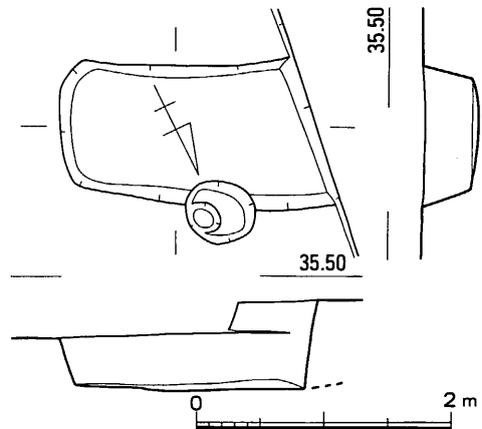


Fig-15 SK-02実測図 (縮尺1/60)

出土遺物はローリングを受けた土器片が少数出ている。

SK-06 (Fig-19)

長径200cm×短径90cmを測る略方形を示し、現存する深さは約40cmで、船底状を示し底辺は45cm×105cmと四角に近い。出土遺物は土師器の甕片及び須恵器の小片が出土したが、ほとんど上部からのものであった。

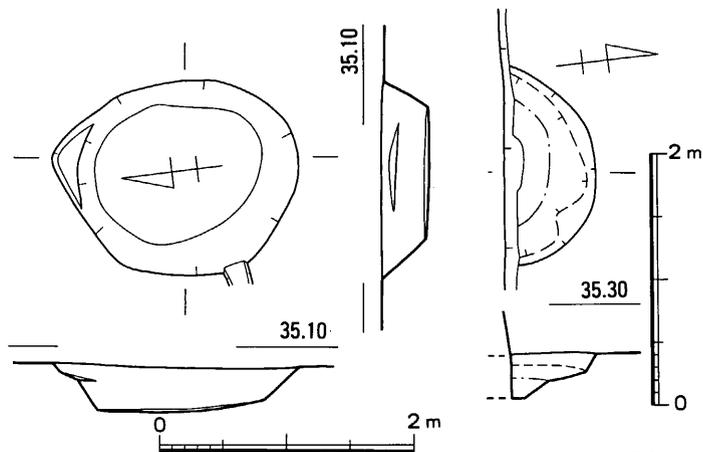


Fig-16 SK-03実測図 (縮尺1/60)

Fig-17 SK-04実測図 (縮尺1/60)

b) 遺物

SK-01出土遺物 (Fig-20 PL-8)

須恵器

坏(1~3)、1は高台を有し、体部がゆるやかに外反する、やや小ぶりなものである。

口径13.2cm、器高4.2cmを測る。色調は青灰色を呈し、内外面ともヨコナデしている。

2・3は口径12.4~12.8cm、器高3.7~3.8cmとほぼ同大で、底部はヘラけづりをしている。

体部は直線的にのびる。なお、3の底部に墨書が見られるが半分を欠損し判読できない。

皿(6)半分以上を欠失するが、口径16.4cm、器高2.5cm、底径12.4cmを測り、底部をヘラけづり後、内外面ともヨコナデにより仕上げている。

土師器

甕(4・5) 4は復元口径20.8cmと小ぶりですが、小片のため胴部の形状ははっきりしないが、

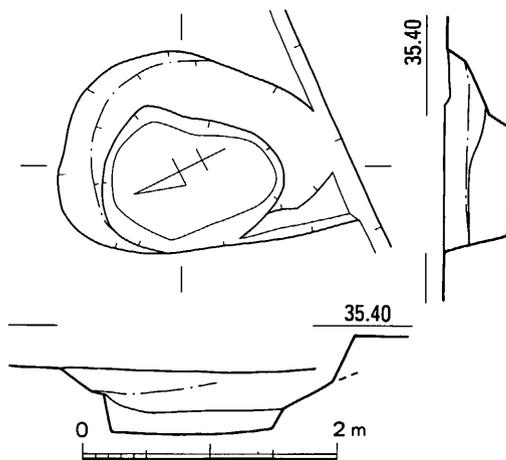


Fig-18 SK-05実測図 (縮尺1/60)

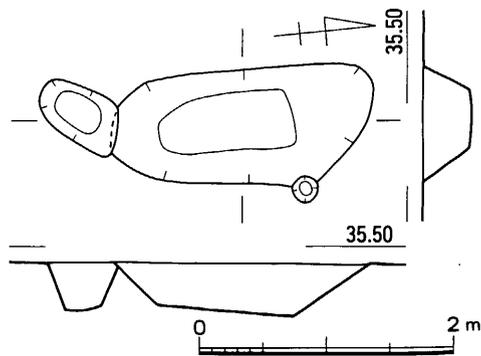


Fig-19 SK-06実測図 (縮尺1/60)

あまり張らず、口縁はくの字を呈し外反する。

体面は胴部外面はハケ目調整の後ナデ、内面はヘラ削りを施し薄くしている。5は復元口径25.8cmで口縁はゆるやかに外反する。内面はヘラ削り。色調は橙色、焼成は少しあまい。

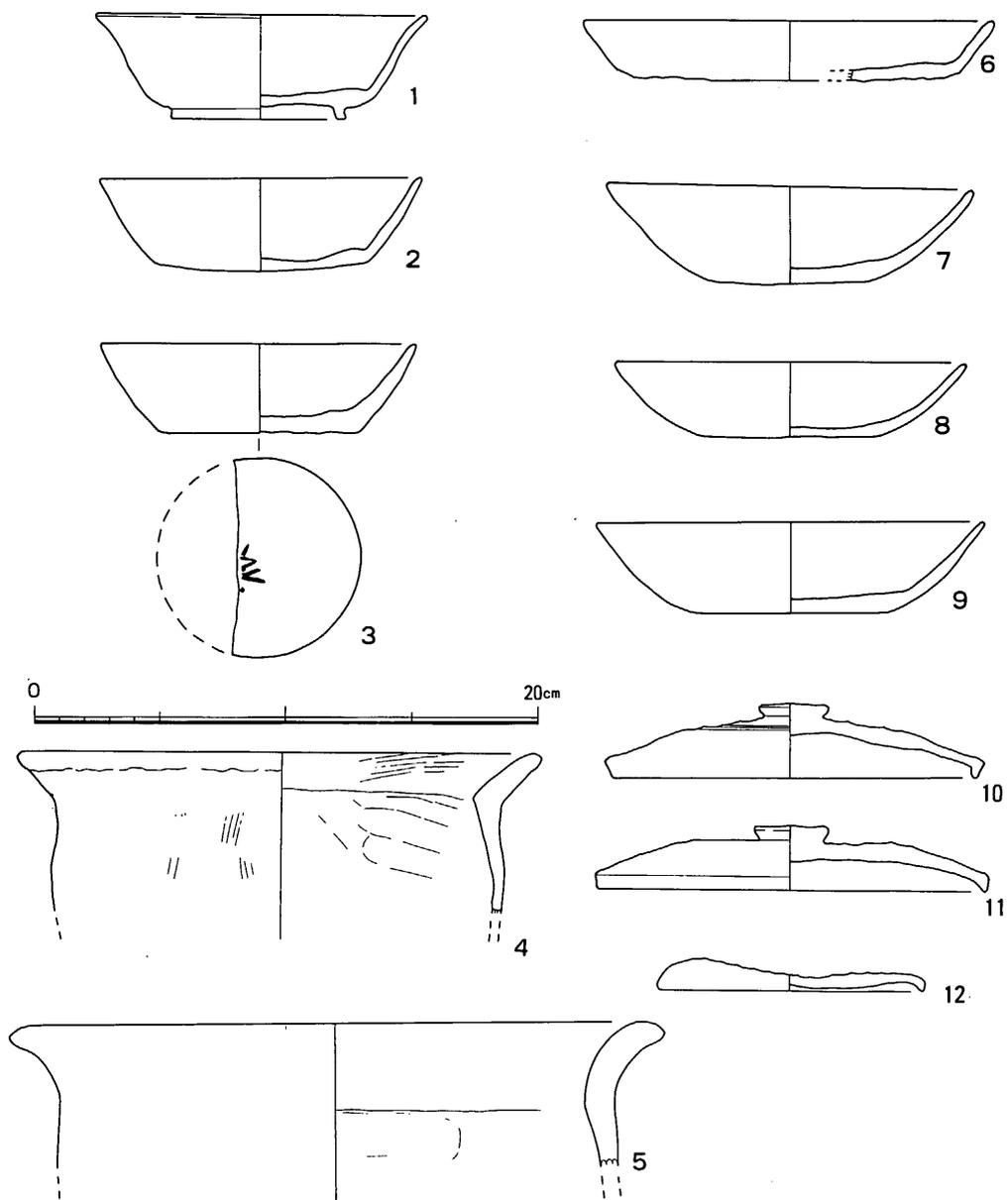


Fig-20 S K01出土遺物実測図（縮尺1/3）

坏（7～9）ともに体部は直線的に外傾する。底部のヘラ削りは摩滅がひどく不明である。口縁径は7が14.5cm、8が13.9cm、9が15.4cmで器高は7が3.7～4.1cm、8が3.6cm、9が3cmである。色調は7がにぶい橙色、8・9が明褐色を呈する。焼成は7・9があまい。

SK-02出土遺物 (Fig-21 PL-9)

須恵器

蓋（1・2）口縁部をおりかえすが、2のほうがシャープである。ともに天上部と回転ヘラ削り、口縁部付近をヨコナデ、体部内面をナデ調整している。胎土はともに微細砂粒を含み、焼成は2があまい、色調は灰色ないし暗灰色を呈する。口径は1が18.2cm、2が13.8cmで、器高は1が2.8cm、2が1.9cmを測る。

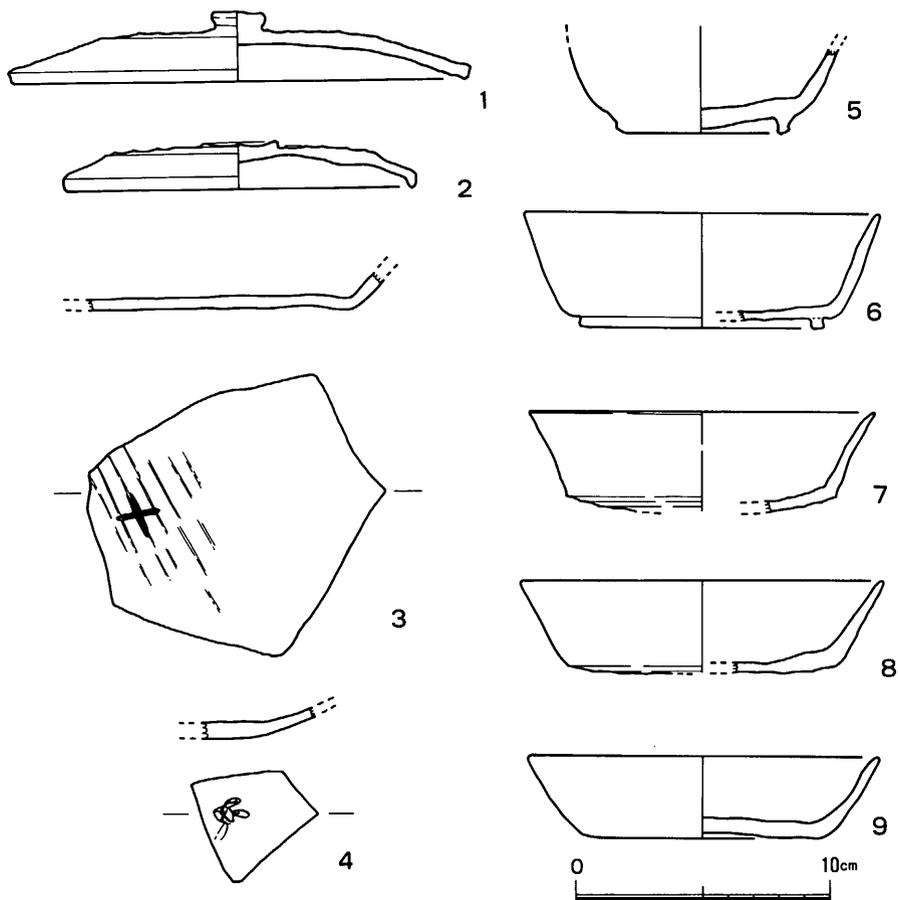


Fig-21 SK02出土遺物実測図（縮尺1/3）

皿(3)破片であり径は不明であるが、底部外面に墨書により「+」または「×」と記している。なお、底部はへら切りのもとに板状圧痕が見られる。焼成は良く色調は灰色である。

坏(4~8) 4は小片で皿か坏の底部と思えるが、一応、坏としてあつかう。底部外面に細い筆で書かれたものであり、「ネズミ」をマンガ的に墨で書いたものではなかろうか。

5・6は高台を有するもので5は上部を欠し判然としないが、やや小ぶりである。6は底部をへら削りし小さい高台をやや外向に付け、体部は直線的にのび口縁がわずかに外傾する。口径14cm、器高4.7cmを測り、焼成・胎土ともに良好である。7・8は口径13.6cm、14.2cmと8の方がわずかに大きい。調整はともに底部をへら削り、その他を丁寧にヨコナデしている。体部は底部より直線的にのびるものの、7のほうがわずかに外傾する。

土師器

坏(9) 底部はややもり上がるものの、体部は直線的にのびる。底部のへら切りは摩滅がひどく不明であるが他の部分はヨコナデである。口径13.8cm、器高3.3cmを測る。焼成は好、色調は橙色、胎土は微細雲母を少量含むもののやや大きめの砂粒も多く含んでいる。

SK-03出土遺物 (Fig-21 PL-9)

須恵器

蓋(10~12) 10・11は口縁部をおりかえすもので10の方がシャープに内傾する。調整はともに天上部を回転へら削り、口縁部をヨコナデ、体部内面をナデ調整している。口径は10が14.8cm、11が15.5cmである。胎土はともに比較的大きめな砂粒を含み、焼成は良好である。

12はつまみをもたない径10.4cmの小ぶりの蓋で、天上部は回転へら削りで口縁および体部はヨコナデである。焼成は良好である。

井戸 (SE)

a) 検出遺構

調査により2基の井戸が出土した。1基は製材した木を四方に組み上げたものと、あとの1基は曲物を利用したものである。

SE-01 (Fig-22 PL-4)

井戸は直径約230cmの隅丸方形を呈し、井戸枠の上部は風化により欠損するが、遺存状態のよいものであった。さて、構造は製材された厚さ4~5cmの板を2~3枚を側板とし東西の側板を南北の側板で挟むようにして、底部は同様の厚みの板で幅25~30cmのものを、ほぞを作って井型に組んで堅固にしている。また、側面中程に横棧木が東西側板に、ほぞを開けて南北側板を補強している。井戸の上部は、先ほどの側板が外へ広がるのを防ぐために、幅4~5cm、長さ約40cmの加工された板、4枚をもって囲んでいる。また、それを外から平たい矢板をもって取り囲み、その間約15cm幅に粘土と大小の礫を置いて、堅く締めている。なお、現存高は井戸枠上部で45cm、井戸最下部で210cmを測った。井戸は現地に残したために、裏込めの状

態については未掘のままであった。

出土遺物は土師器、須恵器、瓦片と多岐にわたった。特に底部に「井田」と読める墨書土器も出土している。

SE-02 (Fig-23 PL-5・6)

東側部分に段を有するものを、直径170cmの円形の井戸で、最下部まで約100cmを測る。

下部は深さ30cm、直径65cmに直径40cmの曲物を据え、その上に次の曲物を据えたものと考えられ、その外側に直径70cm程に割り板を2重にまいて仕上げて

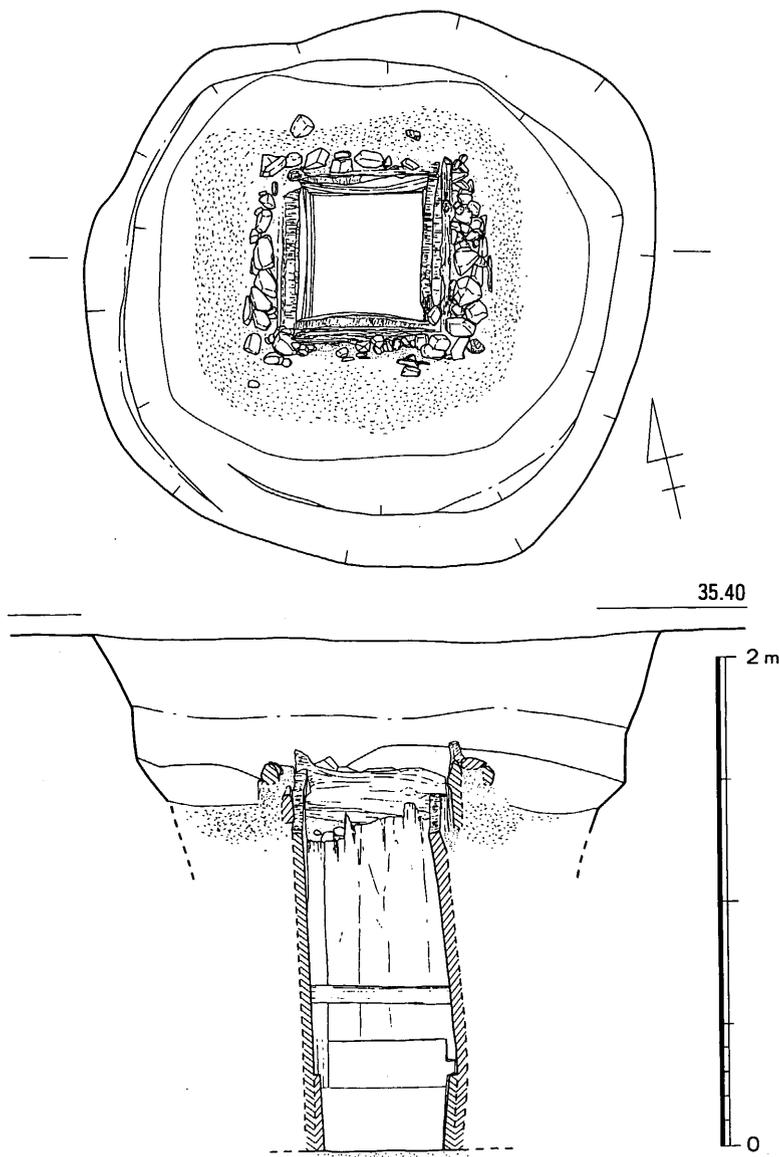
Fig-22 SE01実測図 (縮尺1/30)

いる。周囲の埋土は粘土を用いていた。

遺物は土師器、須恵器の坏、椀などが出土した。また、その中に土錘が1個出土した。

b) SE-01出土遺物 (Fig-24・25 PL10・11・12)

須恵器



椀(1)、わずかに外反する小ぶりの高台を貼付し、体部は下部に少し丸味をもち口縁端部はわずかに外反する。調整は体部のほとんどがヨコナデをほどこしている。口径14.6cm、器高は5.5~5.8cmを測る。色調は灰色、焼成は良好である。胎土は砂粒をわずかに含む。

坏(3~5) 底部はヘラ削りをし、体部は直線的に外傾する。内外面は丁寧なヨコナデをして、底部内面はナデている。3は体部外面に焼成時の重ね焼の黒斑が付く。3・4・5の口径と器高は、3が12.4cm・7.8cm、4が13.1cm・3.7cm、5が13.4cm、4.7cmである。

焼成は3・4は良好であり5はあまい。

壺(6・15) 6は小形の

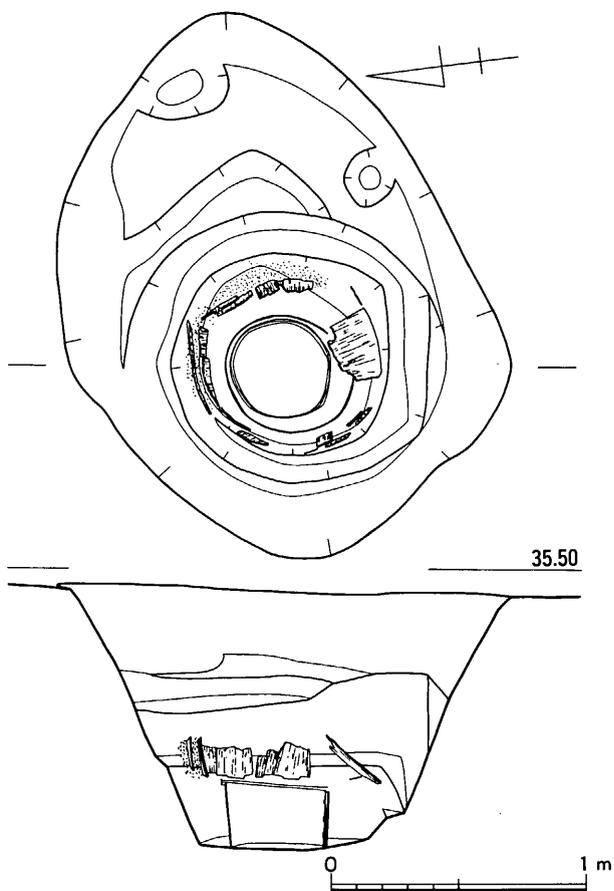
Fig-23 S E02実測(縮尺1/30)

壺の底部片であり底部外面はヘラ削りし、その径は6.2cmである。

15は、高台と口縁部を欠く壺である。胴部最大径は17.8cmを測り上位にあるが、肩は張らない。体部は回転ヘラ削りをし、胴部最大径より上位はその後ヨコナデを丁寧に行っている。焼成・胎土とも良好である。

蓋(9・10) 9は壺蓋であり、壺15とのセット関係は不明である。天上部外面は回転ヘラ削りをし、他は丁寧なヨコナデである。天上部はフラットで体部はややふくらみ口縁端部はわずかに外反する。口径は7cm、器高は4cm。色調は灰色、焼成・胎土ともに良好。

10は口縁端部をおりかえすが、シープさを欠き、天上部のつまみは失損する。天部外面はヘラ削りである。調整は丁寧なヨコナデである。色調は明灰色で焼成はあまい。口径は14.8cmを測る。残存器高は1.2cmを測る。



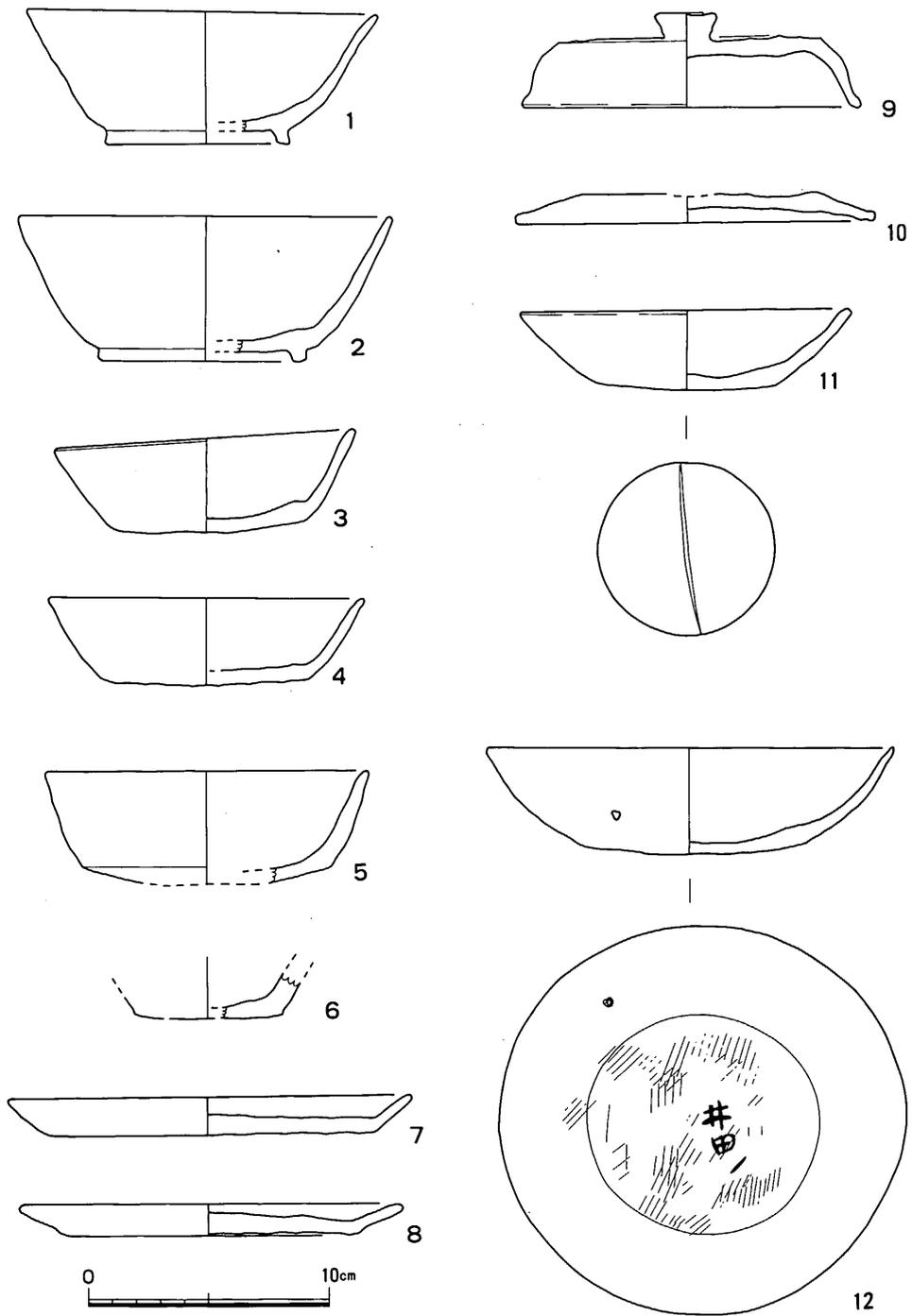
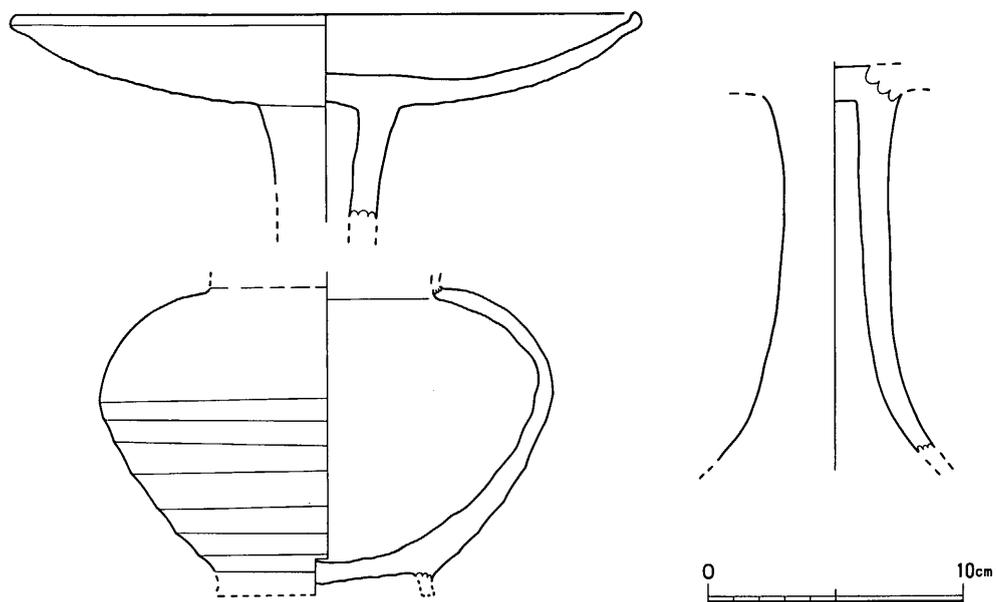


Fig-24 S E01出土遺物実測図① (縮尺 1 / 3)



S E01出土遺物実測図② (縮尺 1 / 3)

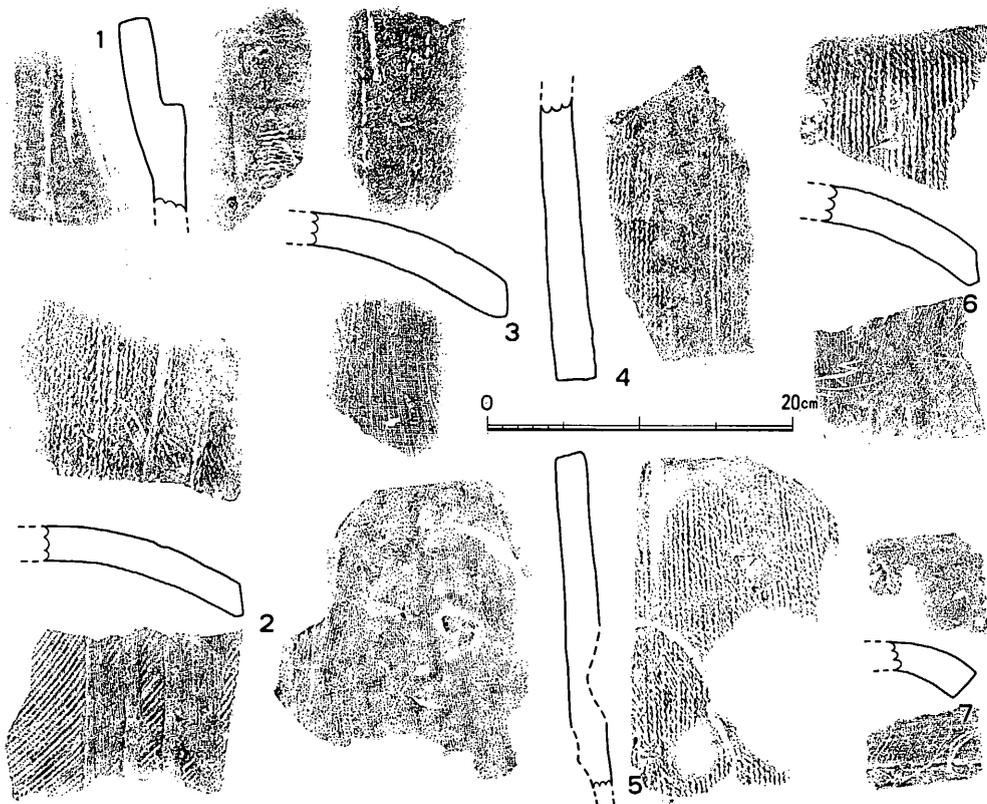


Fig-25 S E01出土遺物実測図② (縮尺 1 / 5)

土師器

椀(2) 小ぶりな高台を付し、体部はやや丸味をち直線的にのびる。調整は磨滅がはげしく不明瞭である。口径15.6cm、器高6.1cmを測る。体部外面に煤の付着を見る。

皿(7・8) 7は口径16.7cm、器高1.6cm、底径13.3cmを測り体部は直線的にのびる。調整は磨滅がひどく不明瞭である。8は口径15.8cm、器高1.3cm、底径12.4cmと7よりやや小ぶりである。底部外面は回転ヘラ削りをし、他の内外面はロクロ回転によるヘラみがきが見られる。色調はにぶい橙色、胎土はやや大きめの砂粒を含む、焼成は良好である。

坏(11・12) 11は底部は回転ヘラ削りし、体部はろくろ回転によりヘラみがきしている。体部はほぼ直線的にのびる。底部外面にヘラ記号を有す。口径13.7cm、器高3.2~3.7cm、胎土、焼成とも良好であり、色調はにぶい橙色を示す完形品である。12は丸底坏の感を身けるが、底部は回転ヘラ切り後、ハケ目を交互に用いフラットにしている。体部は回転によるヘラみがきを丁寧に行い、やや丸味をもち口縁端部はわずかに外反する。なお、底部外面に「井田」と判読できる墨書がある。また、体部中位に外から内へ幅2~3mmの穿孔が見られる。

高坏(13・14) 13は脚部を欠失するものであり、口径は24.8cmと大形である。坏部外面は回転ヘラ削りをし、口縁部は丁寧なヨコナデである。坏部の底部と体部は丸味をもち、境はない。口縁部はわずかに外反し端部を上方へつまみあげ不明瞭ながらも断面三角形となる。胎土はきわめて精良で、淡赤茶色を呈する。

14は脚部の破片であり上位にしほり目をわずかに残す。胎土・焼成は良好である。色調は明褐色を呈する。

瓦類 (Fig-25 PL-11・12)

丸瓦(1) 玉縁の1部を有する小片である。凸面は縄目叩き。凹面は布目のままである。胎土は比較的砂粒が多く、焼成はあまい。

平瓦(2~7) すべて平瓦の小片であり、凸面は縄目叩きのもの(3~6)とその後ヘラ状工具でナデたもの(7)が見うけられる。凹面は布目を部分的にすり消している。(2)のようにあらいハケでナデ消したのものもある。胎土、焼成ともあまりよくない。

SE-02出土遺物 (Fig-26 PL-13)

須恵器

鉢(1) 体部は丸く、頸部を強くつまみ外反させて口縁部を作りあげ、丸底となる鉢の破片であり。底部から体部にかけて回転ヘラ削りをし、口縁、内部は丁寧にヨコナデしている。口径23.7cm、残存器高14.1cmを測る。色調は明灰色、焼成はにぶい。

土師器

椀(2・3・7) 2は井戸の掘り方より出土し、体部外面回転ヘラみがきをし、他の部は磨滅のため不明瞭。体部はわずかに丸味をもち、口縁部は少し外反し、高台は底部端に外傾し

て貼付している。口径は17.8cm、器高は7.6cmを測り、色調は明黄褐色、焼成は良い。

3・7は底部の小片であり、摩擦もはげしい。底部径は3が9cm、7が7.8cmである。

坏(4~6)ともに底部外面は回転ヘラ削りであり、6はやや上位まで削っている。他は回転による丁寧なヨコナデをしている。7の底部にはわずかに調整時の圧痕が見られる。

それぞれの口径、器高は4は13cm、3.3~3.6cm、5は13cm、3.1cm、6は14.9~15.2cm、4cmである。ともに、焼成・胎土は良好であり、色調は明赤褐色を呈す。

土製品

土錘(8) 長径4.7cm、最大径1.9cm、穿孔径6mmの円形。土製の錘である。ほかにピットよりも土錘の破片が一点ほど出土している。

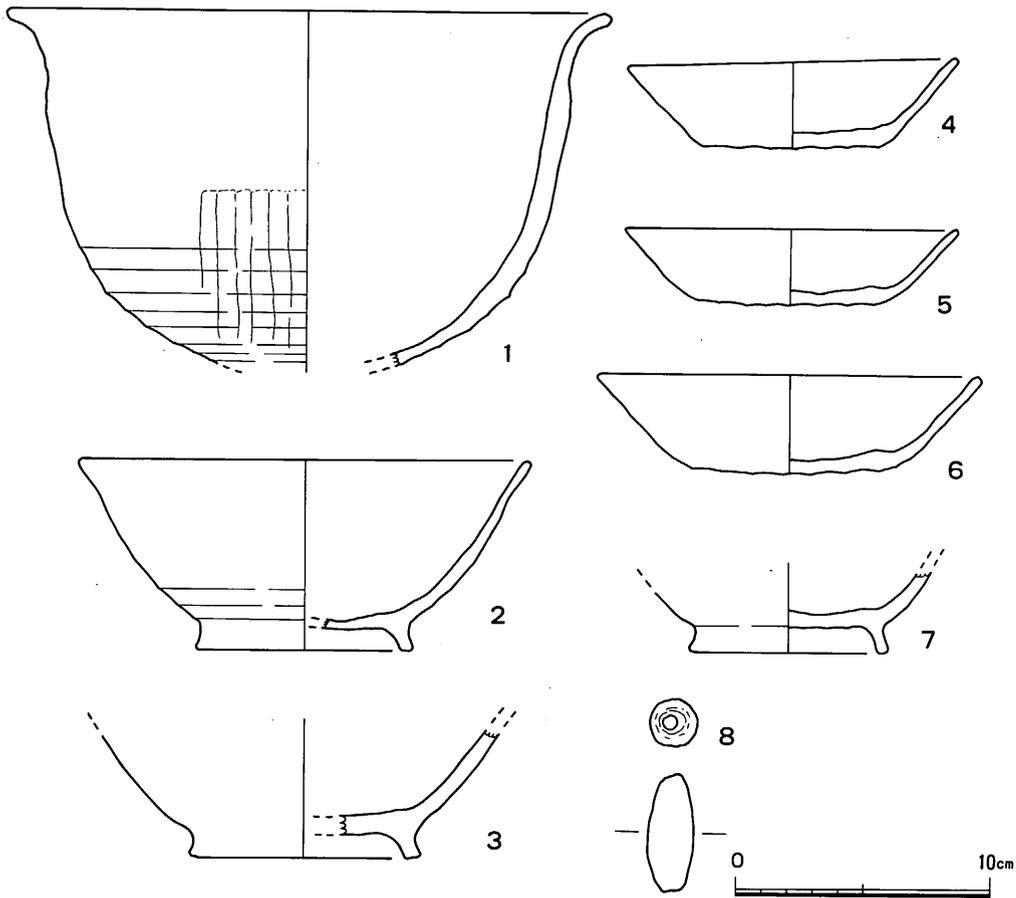


Fig-26 S E02出土遺物実測図 (縮尺1/3)

その他の遺構 (S X)

S X-01 (F i g - 2 7 P L - 13)

60×73cmの楕円形の土壇のやや北隅よりに、土師器の甕を据えている。その甕は小礫によって周囲を固定されて埋置しており、その小礫の中には鉄鐸状のものも2、3個ある。甕の中には石英質の2～5cm程の自然礫が10～15粒入っていた。甕の上部は欠損してごく一部が復元できた。用途については判然としないが、宗教的又はじゅう術的な行為の遺構と考えられる。なお、大宰府史跡第102次調査のS X-3010のように地鎮遺構に近似している。

註① 大宰府史跡 昭和61年度発掘調査概報 昭和62年 九州歴史資料館編

S X-01出土遺物 (F i g - 2 8 P L - 13)

甕 大形の甕形土器で口縁部は1部しか残っていない。口縁は頸部より直線的に外反し、胴部は、あまり張らず、底部は平底に近い丸底である。口縁部付近をヨコナデ、胴部外面をハケ目調整し、内面は底部付近はナデを施し、体部から頸部までヘラ削りする。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、褐色を呈す。底部外面には煤の付着を見る。なお、器高は29.8cm、復元口径27.8cm、胴部径は26.4cmである。

その他の出土遺物

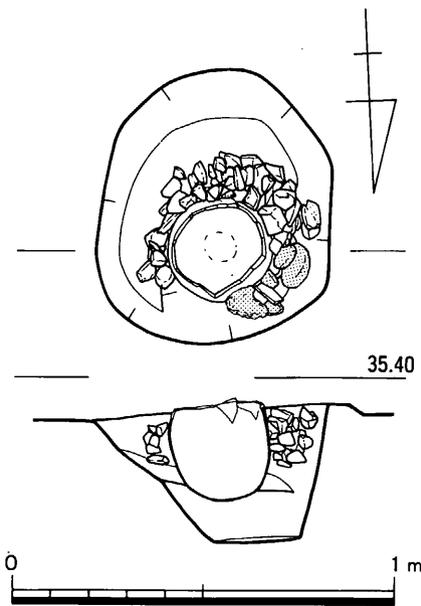


Fig-27 S X01実測図 (縮尺 1 / 20)

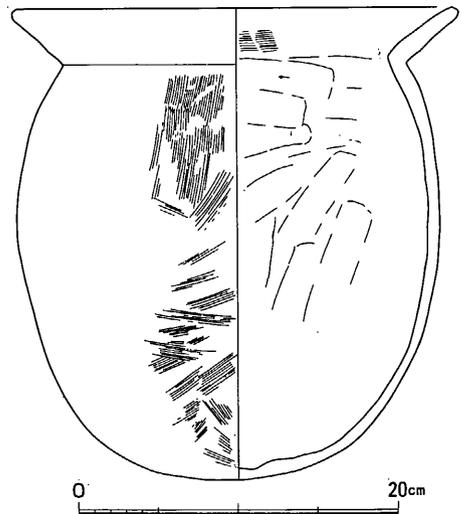


Fig-28 S X01出土遺物実測図 (縮尺 1 / 5)

墨書土器 (Fig-29 PL-14)

調査区中央のSD04に切られたピットの中より出土した皿の底面にヘラ記号とともに、丸に「※」印を書している。記号のように思える。

古銭 (PL-14)

皇朝12銭 古銭はSX-01の南約60cmの浅いピットの中から(一部分焼けていた)土師器の小片とともに出土した。さて、古銭は4枚が重なった状態でとりあげられ、一番上のものは半分が欠失していて、2枚目も周辺が破損している。1枚目は「神口口宝」と読め2枚目は「口年口口」と読める。皇朝12銭において「神」がつくのは「神功開宝」(765年)であり、「年」とつくものは「万年通宝」(760年)と「長年大宝」(848年)があげられる。が、1枚目の「神功開宝」に時代的に近い「万年通宝」ではなかろうか。

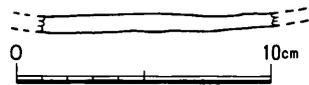
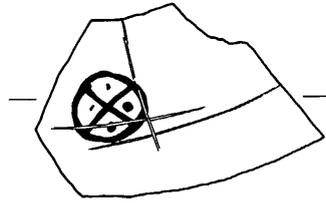


Fig-29墨書土器実測図
(縮尺1/3)

溝状遺構 (SD)

SD-01 (Fig-30)

南北に縦断し幅は50~80cmあり、断面形は逆台形を呈し、深さは15cm程と浅い。

SD-02 (Fig-30)

SD-01・03・04を切っており、一番新しい溝であり、調査地の中央で90°に曲がり北から東へとる。幅は平均20cmと狭く、深さも10cm以内と浅い、断面形は逆台形。

SD-03・04 (Fig-30)

ともに完結せず北側で途切れる。幅は平均25cmで、深さも10cm以内である。また、SD-02・03・04の南北部分は、現在の田の畦畔に近い位置にある。

SD-05 (Fig-30)

これも完結しない溝であり南側で途切れる。幅は10~20cmと狭く、深さも5cmと浅い。これも現在の畦畔に近い位置にある。

SD-06 (Fig-30)

完結しない溝であり南側で途切れる。幅はSD-05よりやや大きく、約30cm程であり、深さは10cm前後である。

b) 遺物

溝よりの遺物は、ほとんどなく、また、小片であり、かなりのローリングを受け時期を決めるのに困難であった。

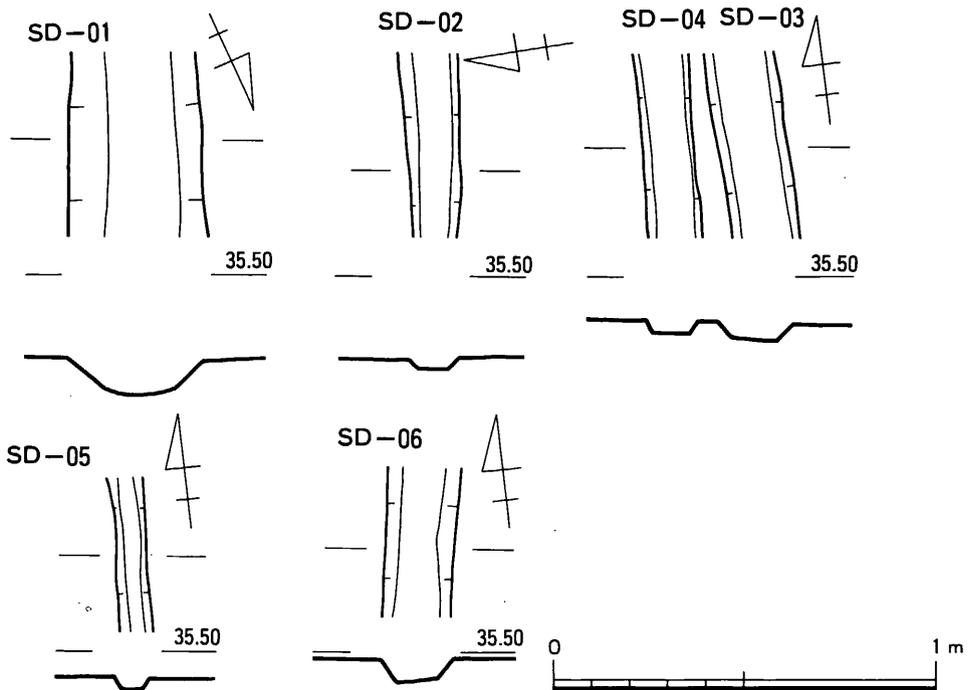


Fig-30 S D01~06断面図 (縮尺 1/20)

IV. まとめ

調査によって、井戸 2・掘立建物跡 9 (うち 2 棟は不明確) と土壌など多数を検出した。

なかでも柱穴に柱痕を残すものが、10ヶ所近くあり調査区の東半部に集中し、地域が底湿地であった事と粘質土層の中に作られていたことが伺える。また、柱穴の底に根じめとして、平石・小石を敷いたもの、また、陶片 (塼・瓦片) を利用したものもある。

掘立建物は、東西棟 2・南北棟 7 が確認され、その主軸は南北棟で $N-7.5^{\circ} \sim 13^{\circ}-E$ 、東西棟は $N-76.5^{\circ} \sim 78.5^{\circ}-W$ の中におさまり、ほぼ一定である。建物柱穴埋土よりの遺物は少なくまた、小片で時期決定はむずかしいもの、おおむね 8 世紀代と考えられる。

井戸は 2 基検出し、S E 01 は規模的に大振りであり、大宰府郭内でも発見例の少ない立派な作りである。出土遺物として 8 世紀中頃の土器であり、埋土の上部より布目瓦片が出土しており西へ約 600m 離れた所にある杉塚廃寺からも同期の瓦片が出土している。

井戸内より出土した「井田」の墨書土器であるが地域に関連する「地名」「呼び名」はなく不明であり、人物名などを今後検討する必要がある。また、土器片に記号のように墨書したものがあり、意味するものは呪いであろうか。地鎮遺構とした S X 01 は、類例よりそうしたが、

付近より皇朝十二銭が出土していることも興味深い。

溝状遺構は全て浅いものであり、8世紀代の遺構を切っており、また、方向は南北又は東西と直行し現在の田畑の畦畔にはほぼ一致する所があり興味深い。

以上のことから、この地は大宰府条坊復元案によれば、右郭18条5坊の中にあり大宰府政庁より直線距離で1,600mであり、郭内縁辺部において、かなり大宰府政庁と関連深い遺構の発見は貴重であり、今後の周辺部の調査を重ねることによって、その全ぼうが明らかになるものと確信する。

最後に、井戸（S E 01）は申請建物の基礎工事の影響を受けずに現地に保存することができた、ここに記し関係者にお礼する次第です。

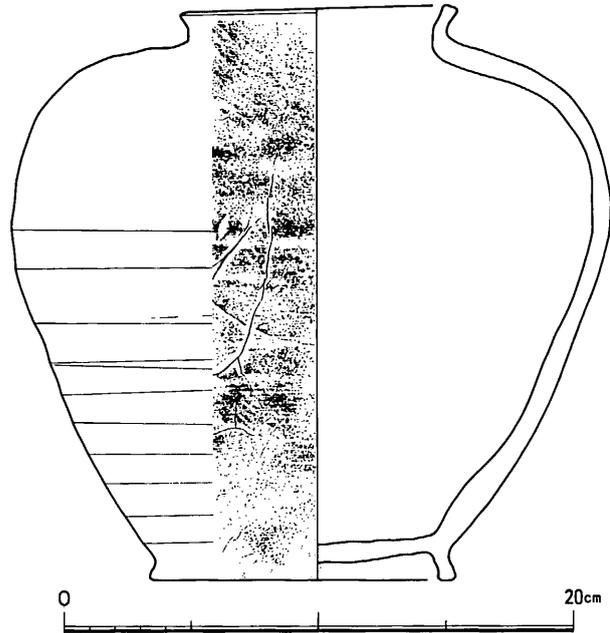


Fig-31壺形土器実測図（縮尺1／3）

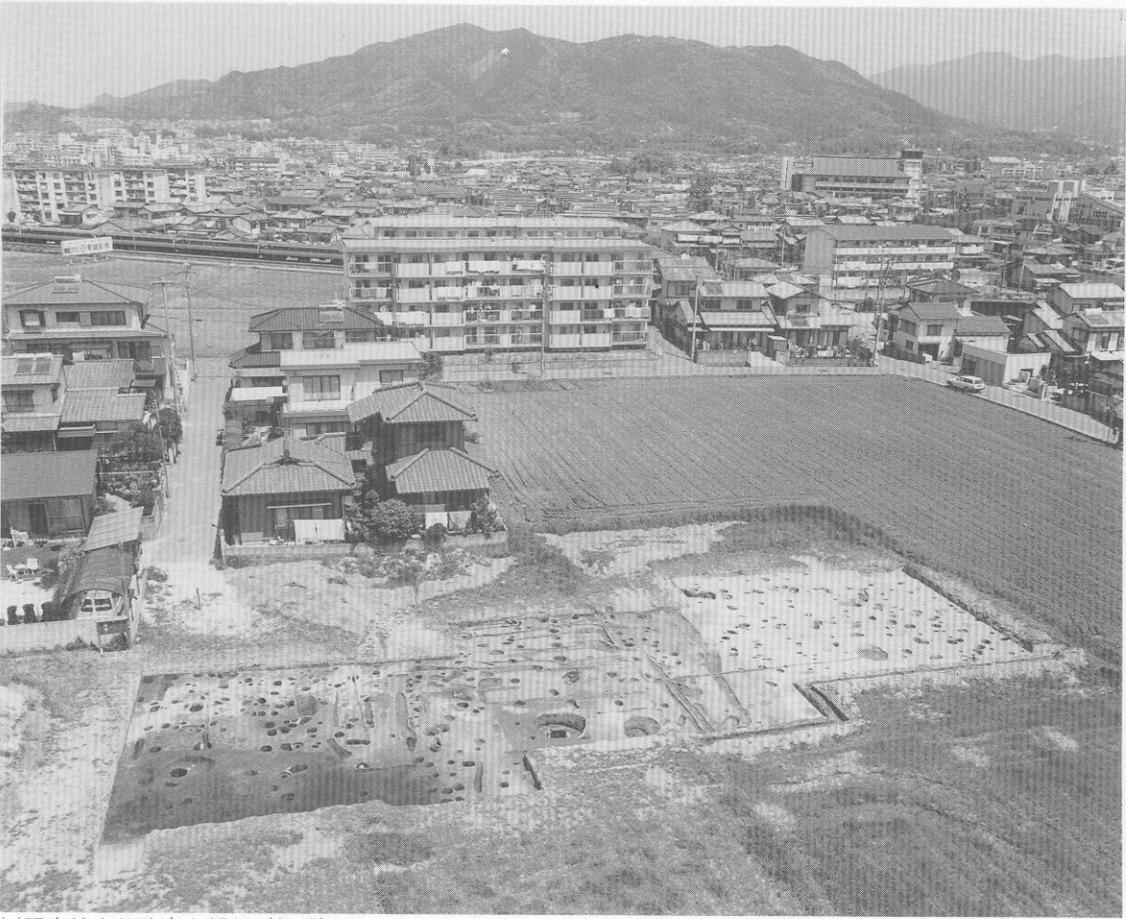
V. 付編 (Fig-31 PL-14)

調査の地権者である渡邊ハルヨ氏の自宅に代々保管してある資料をここに紹介しておく。

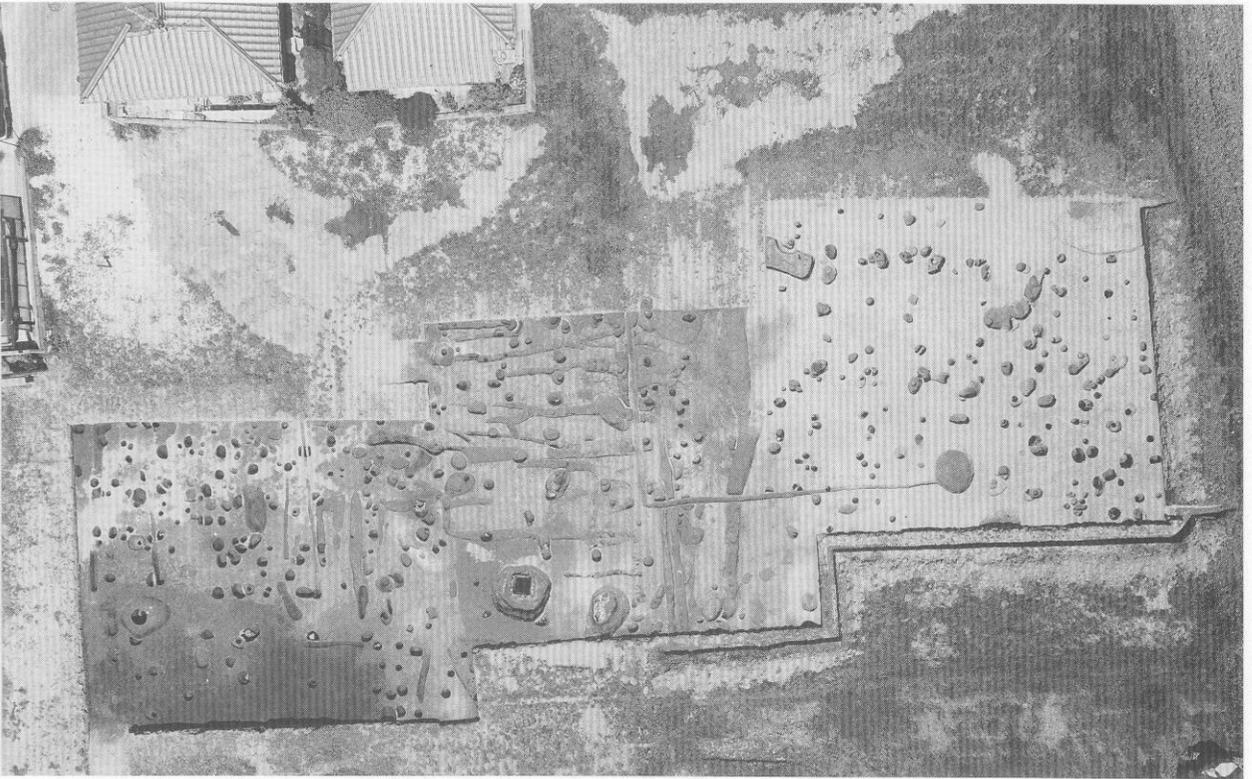
残念なことに出土地・発見年は不明である。

底部端部に、高台を外傾して貼付し、体部は丸味をもち胴部の最大径は中位よりやや上方にあり、肩を少し張った感を受ける。頸部はすぼまり外反し、口縁端部は平坦面をもつものの外傾する。調整は体部外面、平行タタキの後に回転ヘラ削りをおこない、特に下半はタタキ目は見えなくなっている。口縁から頸部は丁寧なヨコナデである。内面は回転ヘラ削りである。口径は10.8cm、器高22.4～22.7cm、胴部径23.5cm、底部径12cmを測る。色調は暗青灰色、胎土は大粒の砂粒も含むが良好であり、焼成もよい。時期として奈良時代の所産であろうか。

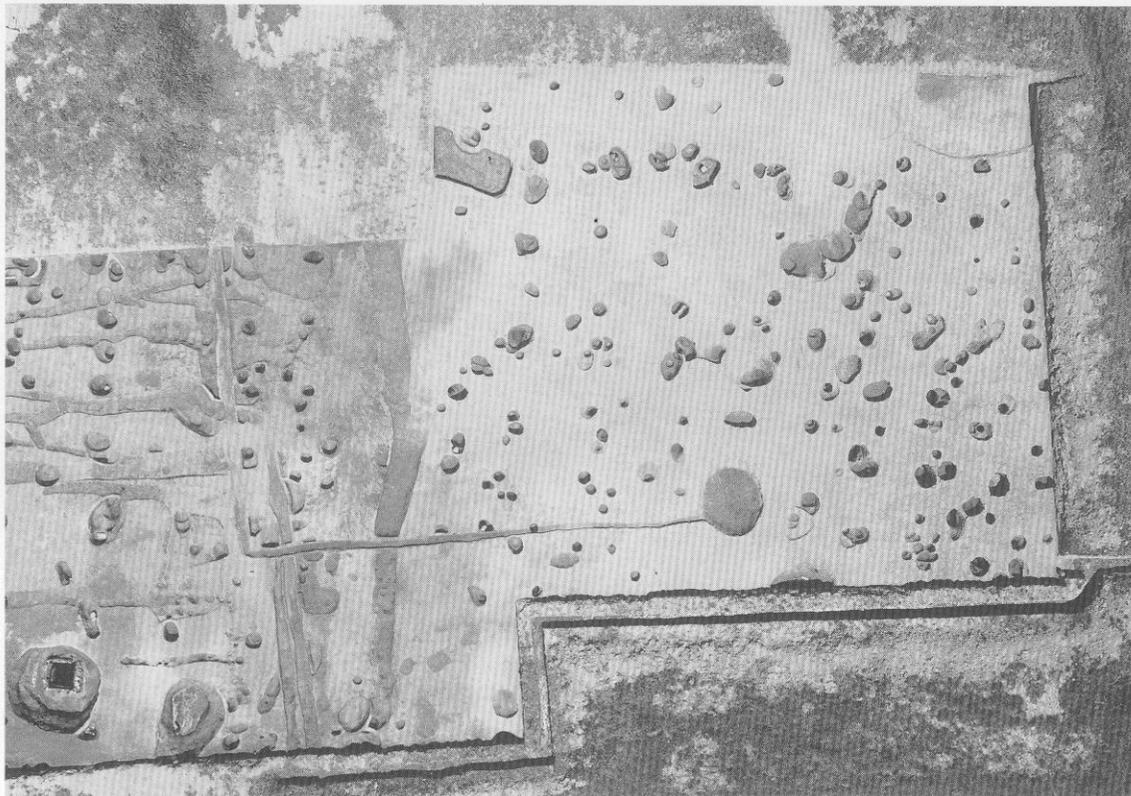
圖 版



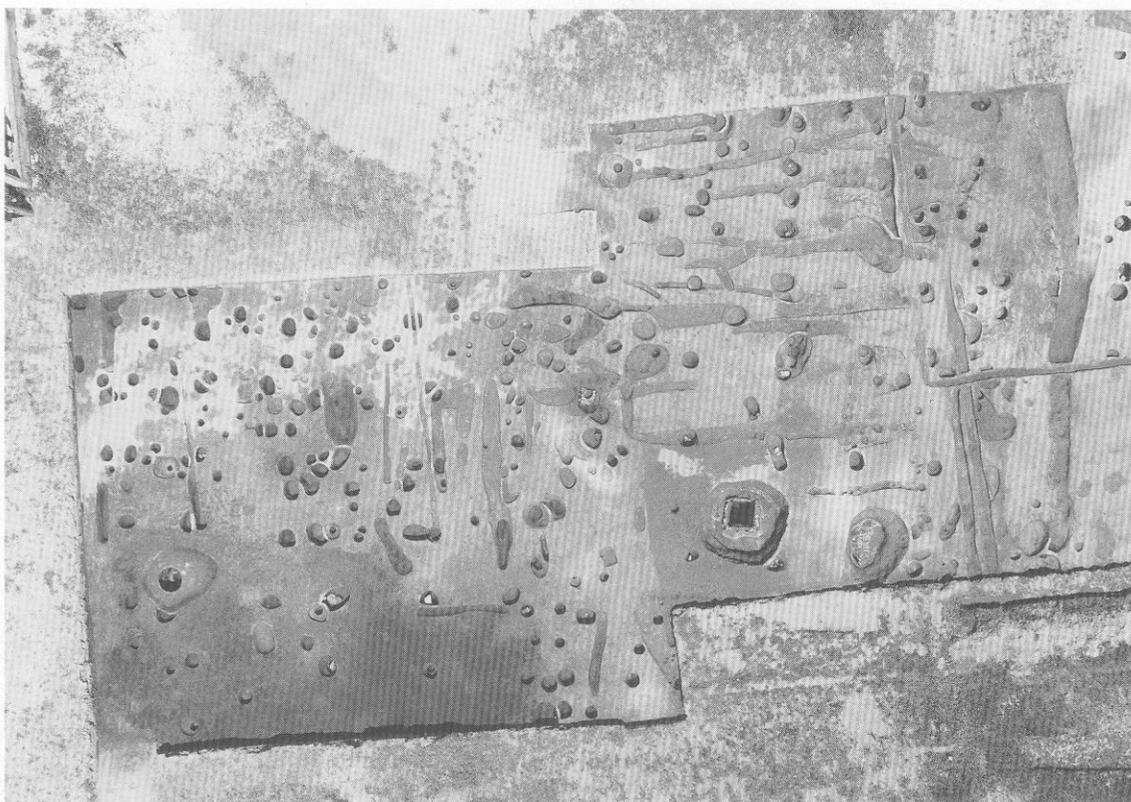
(1)調査地より政庁を望む (気球)



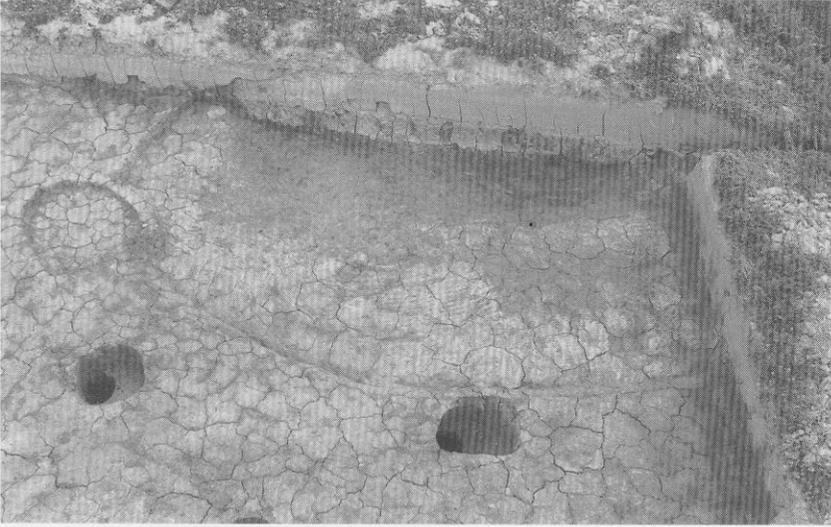
(2)調査地全景 (気球)



(1)調査地全景 (東半部・気球)



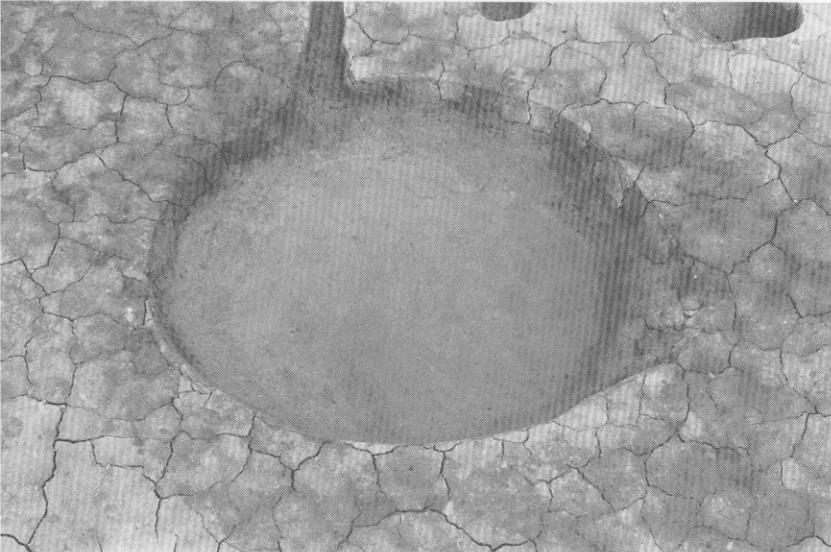
(2)調査地全景 (西半部・気球)



(1) S K 01 (南より)

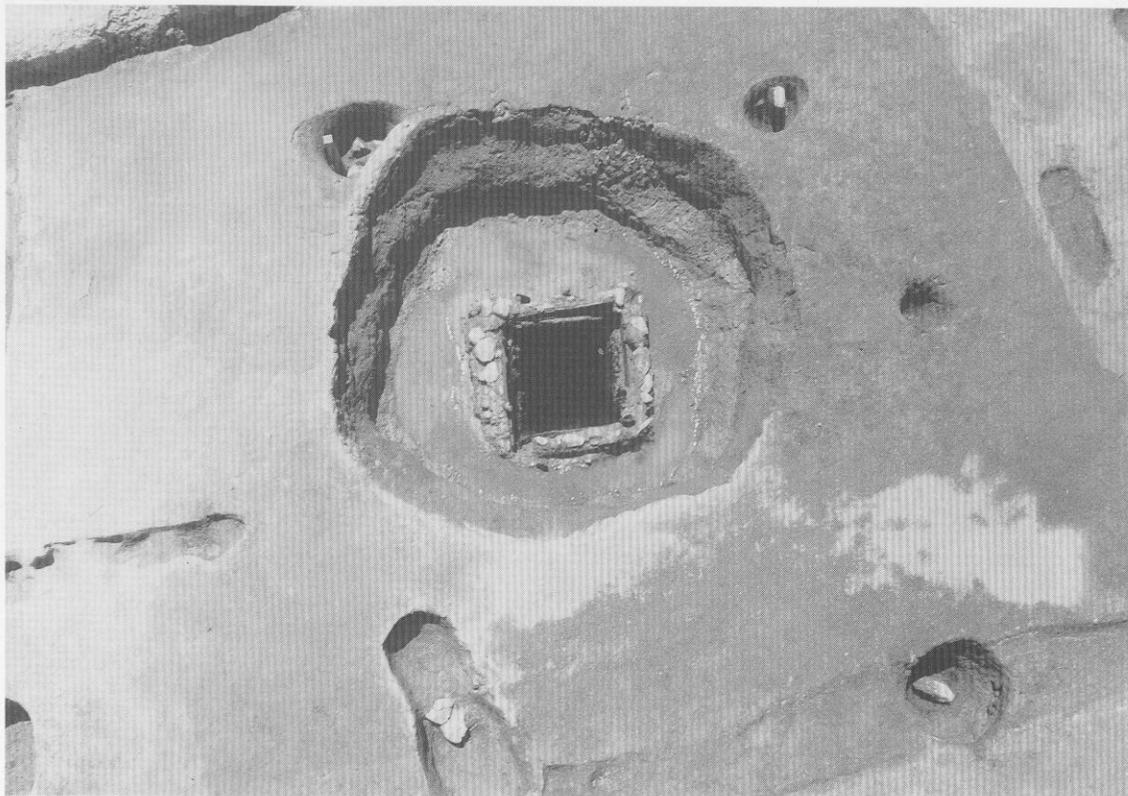


(2) S K 02 (南より)

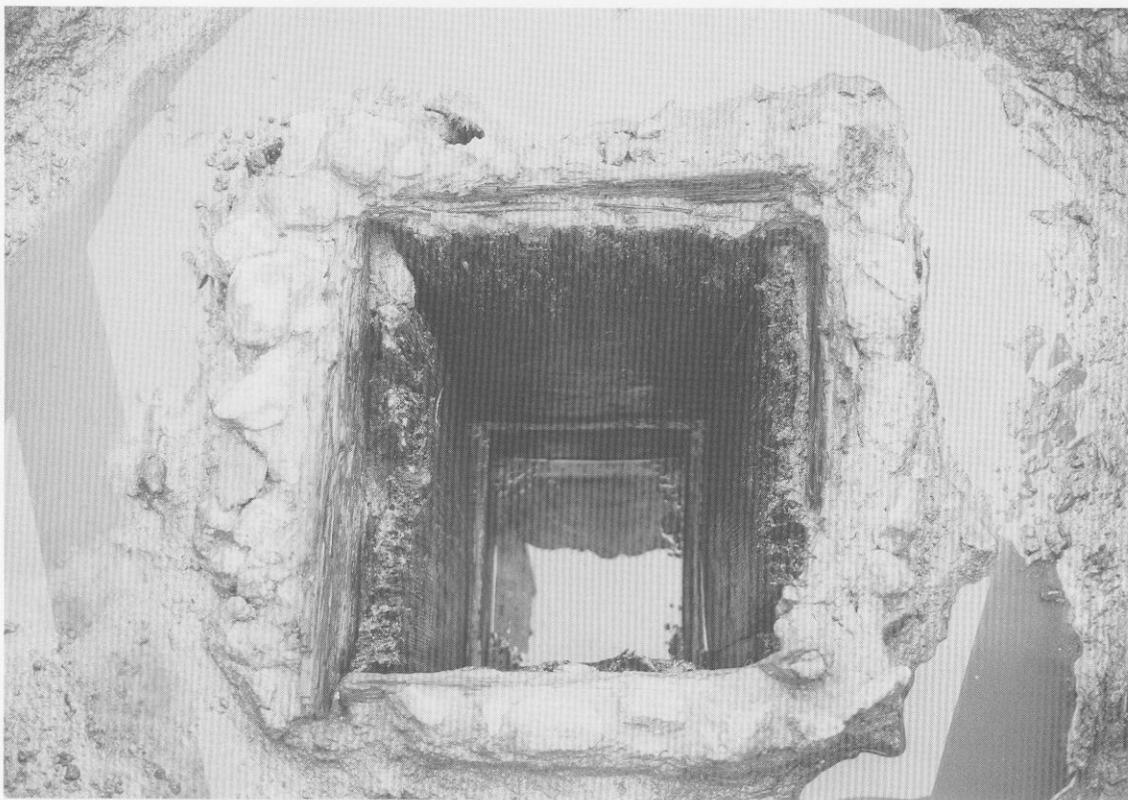


(3) S K 03 (東より)

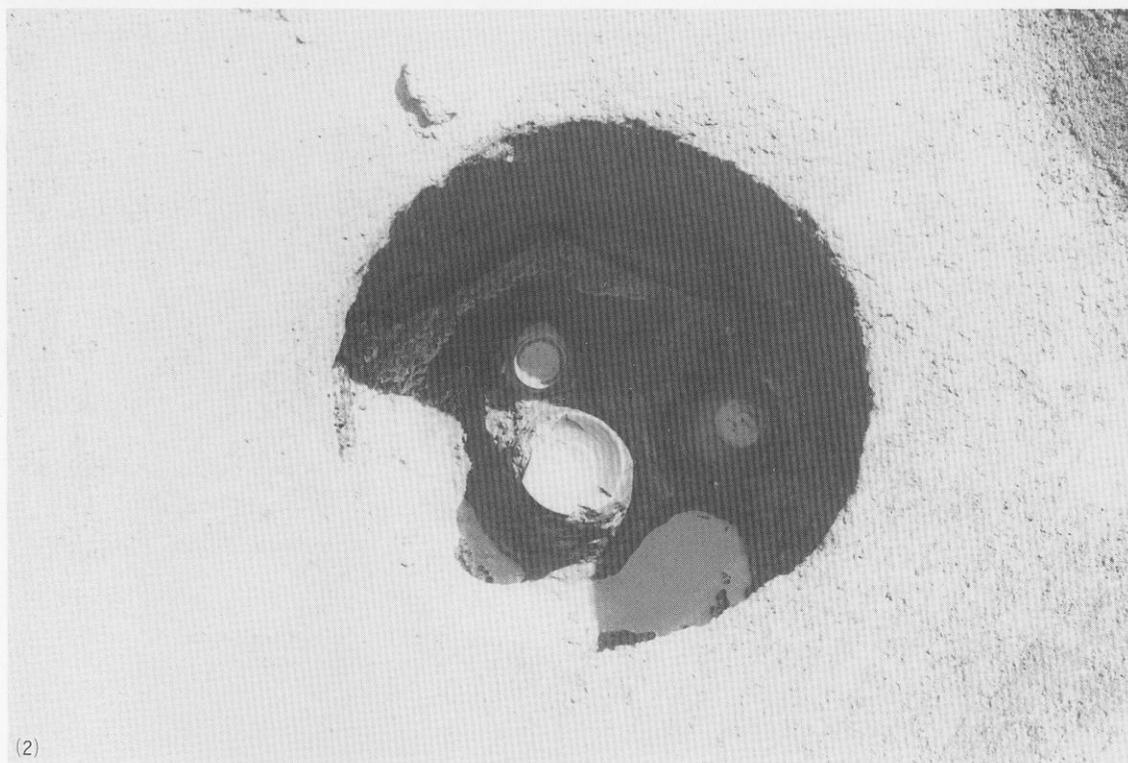
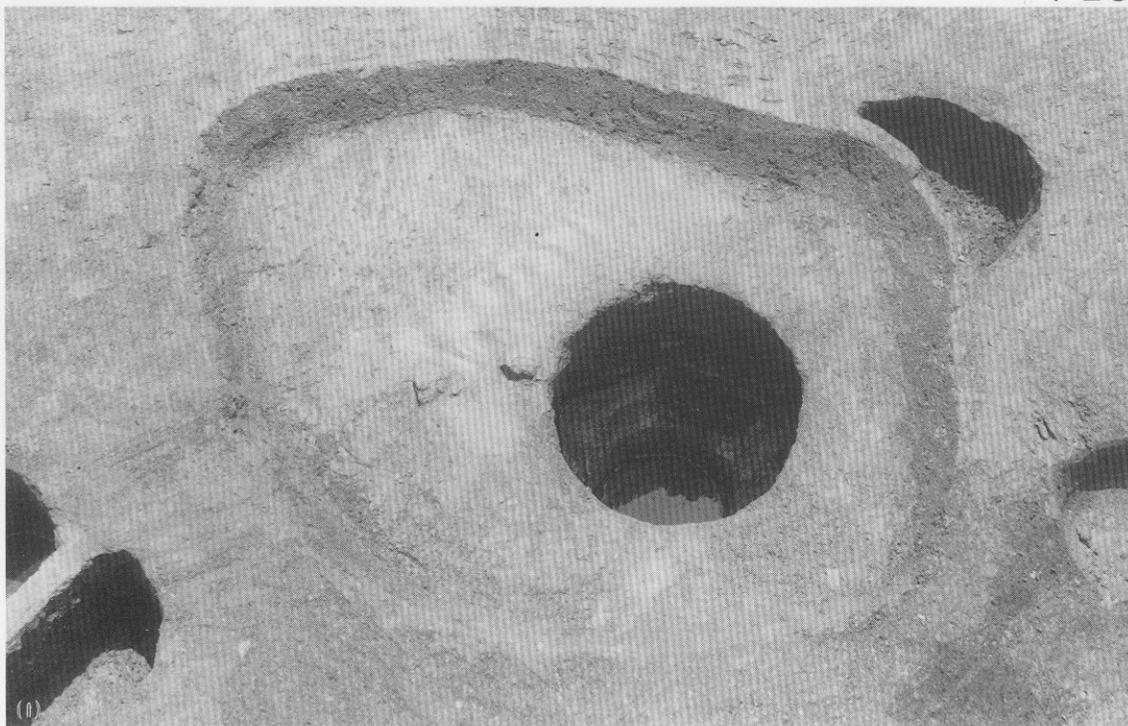
PL4



(1) S E 01 (北より・気球)



(2) S E 02近景 (北より)



(2)

(1) S E 02 (北西より) (2) S E 02遺物出土状況

PL6



(1)



(2)

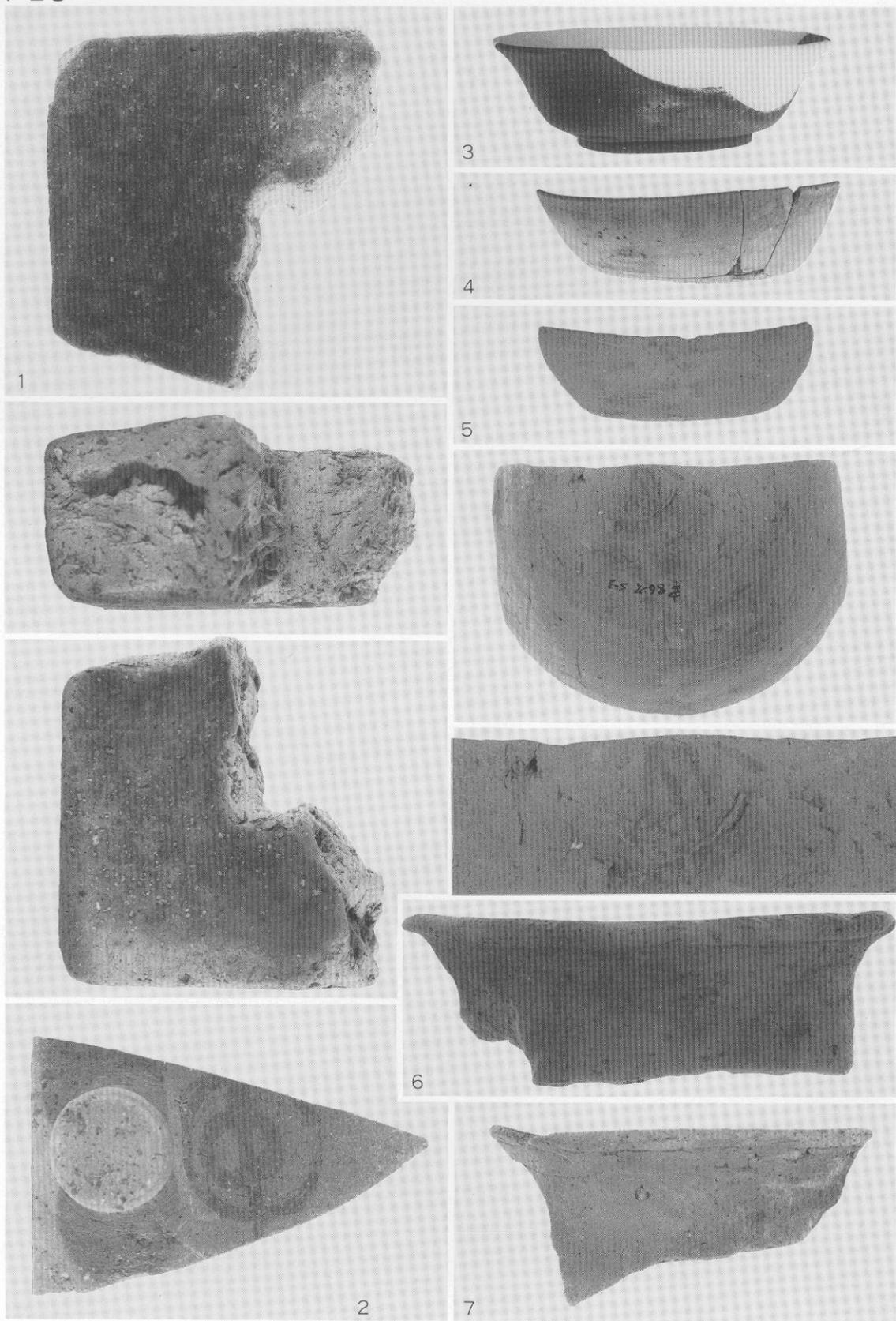
(1) S E 02遺物出土状況 (2) S E 02底部の状況



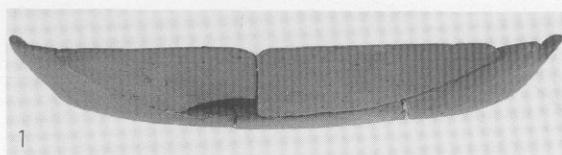
(1) S X 01 (西より)



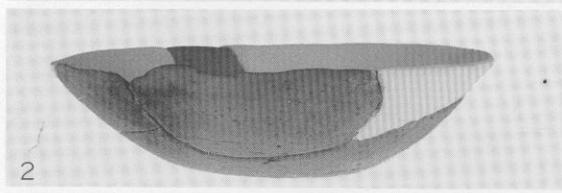
(2) 発掘調査風景 (東半部)



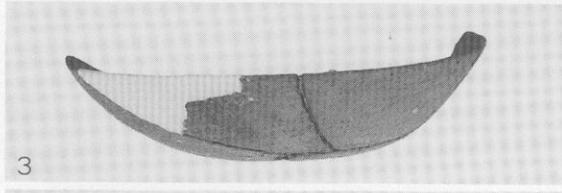
S B、S K01出土遺物 I (S B05) 2 (S B04) 3~7 (S K01)



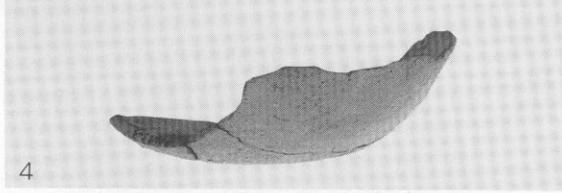
1



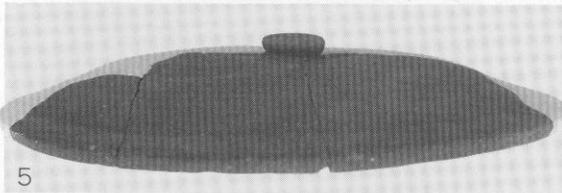
2



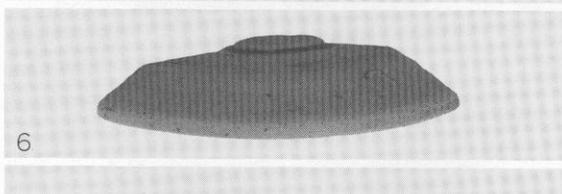
3



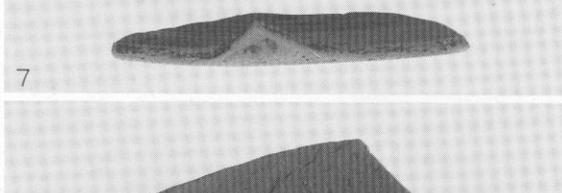
4



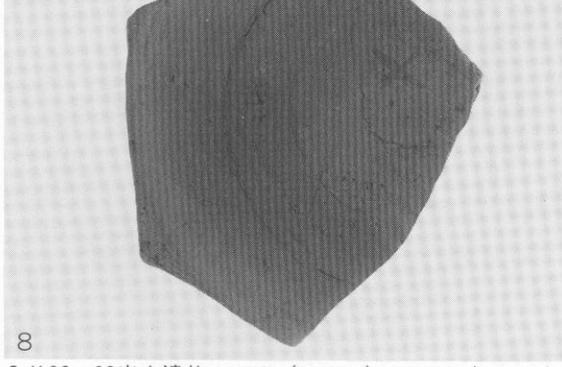
5



6



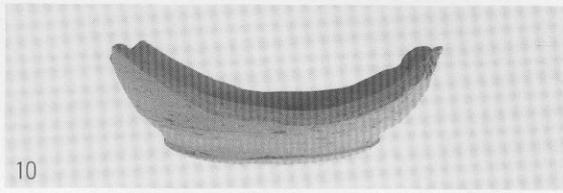
7



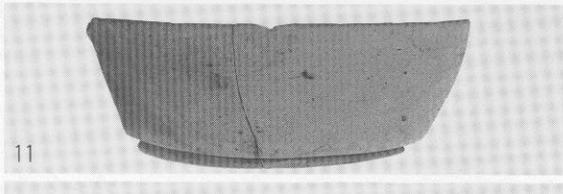
8



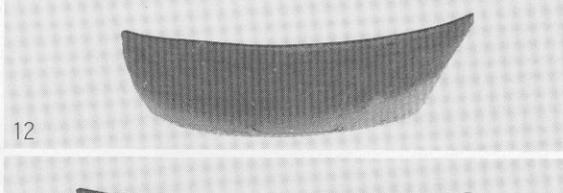
9



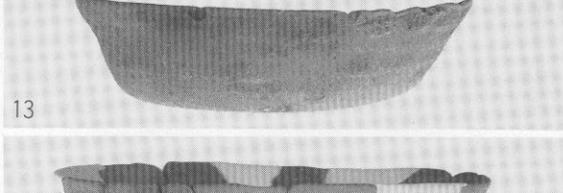
10



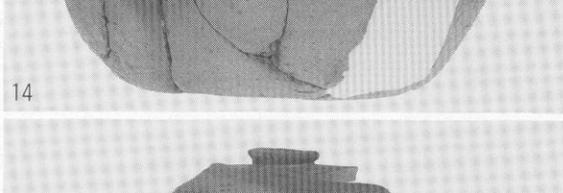
11



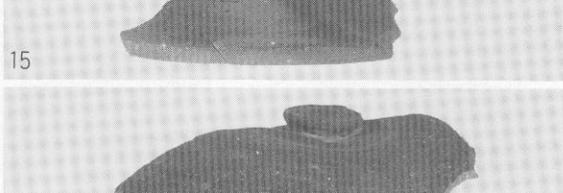
12



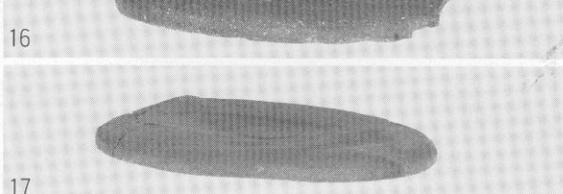
13



14



15

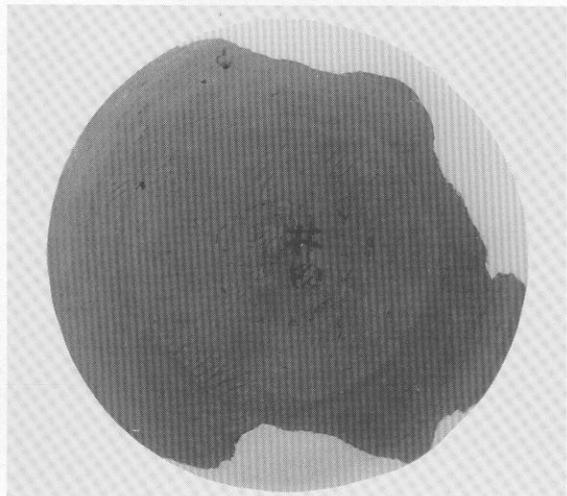
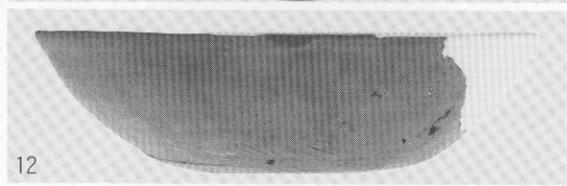
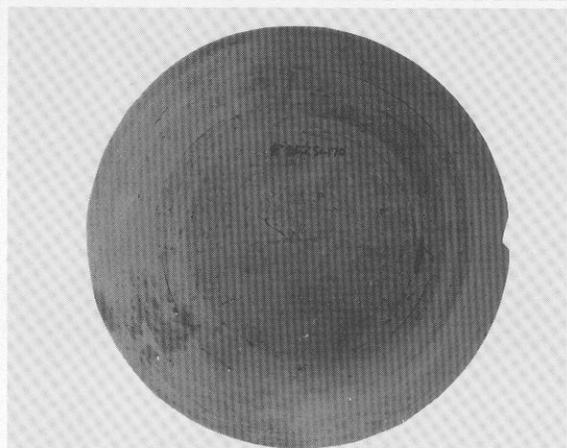
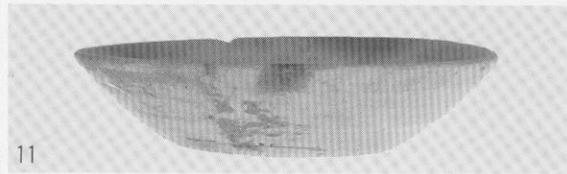
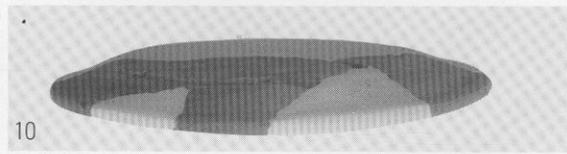
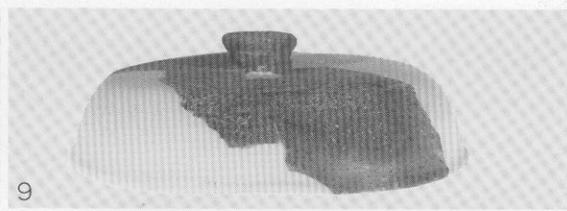
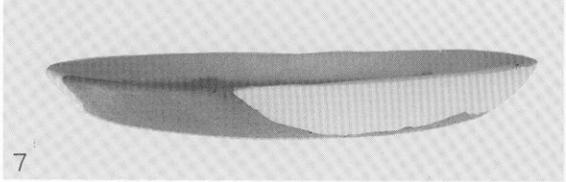
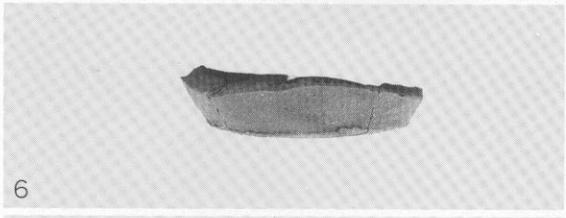
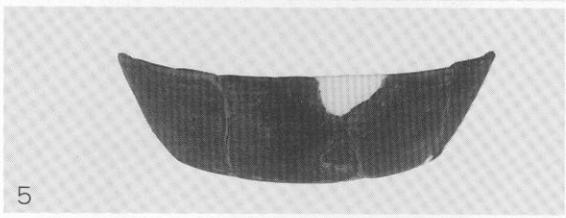
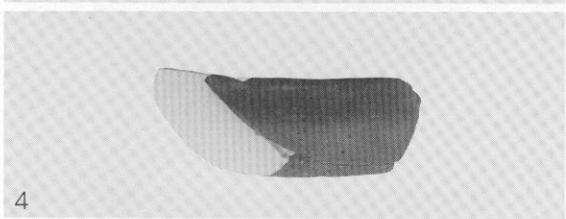
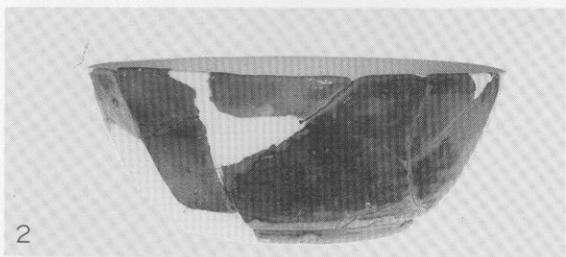
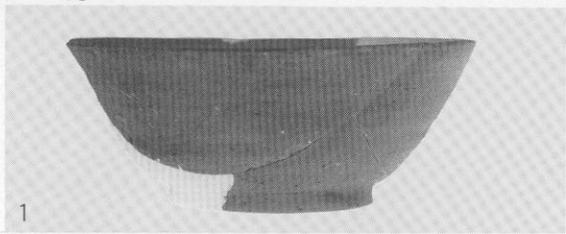


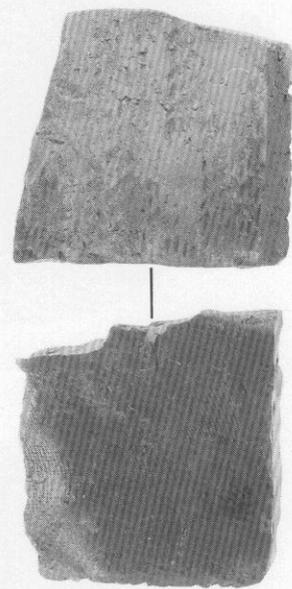
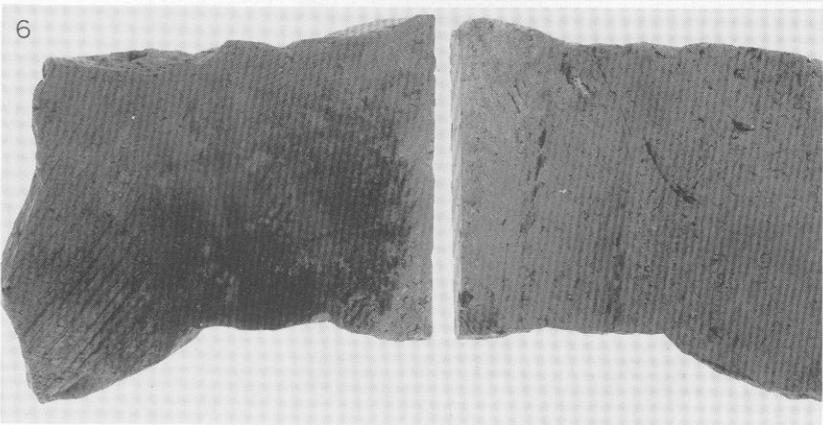
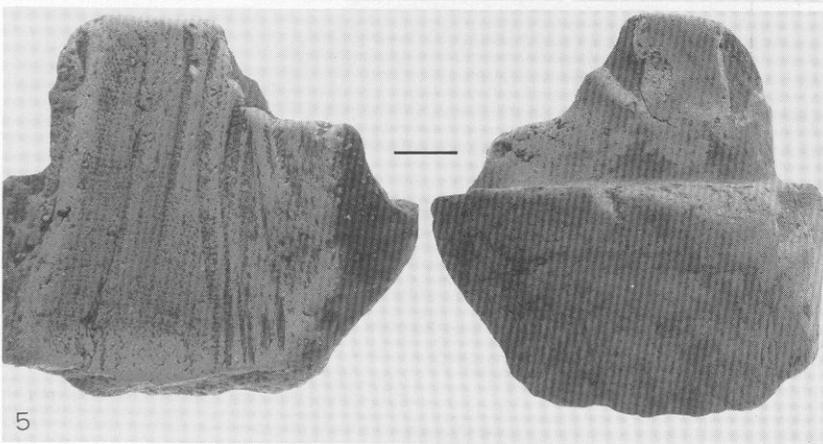
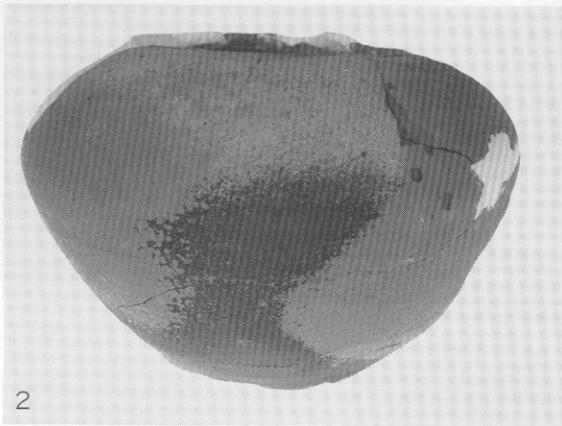
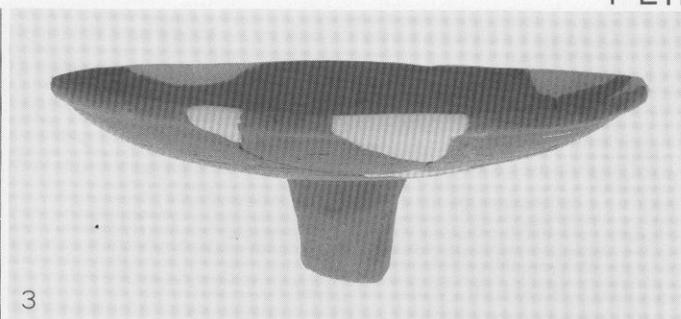
16



17

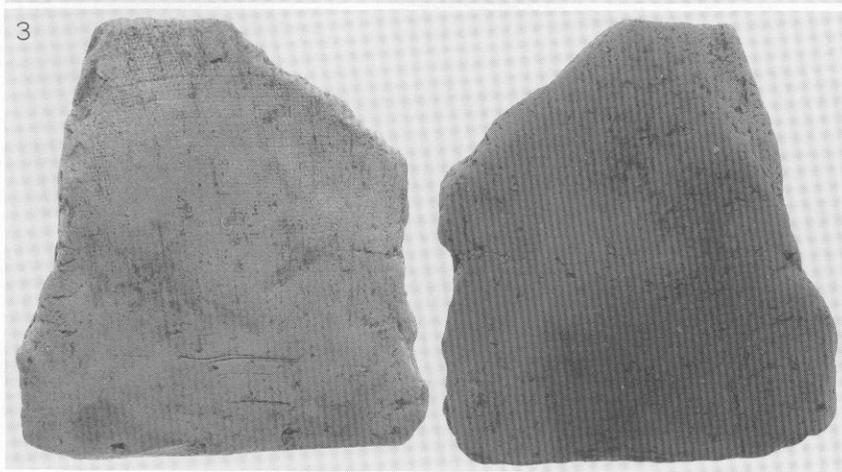
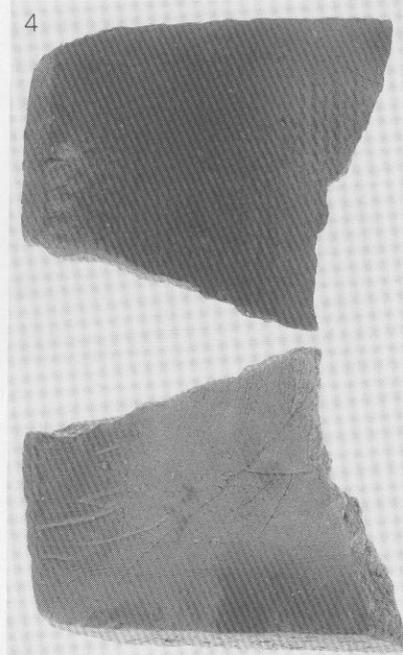
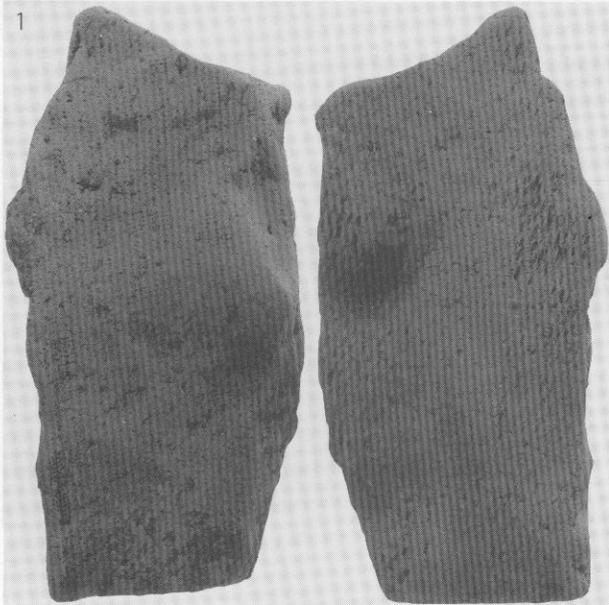
S K02、03出土遺物 1~14 (S K02) 15~17 (S K03)



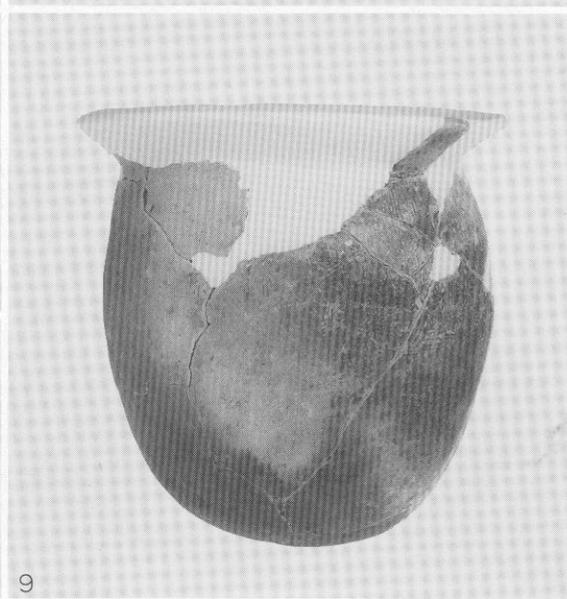
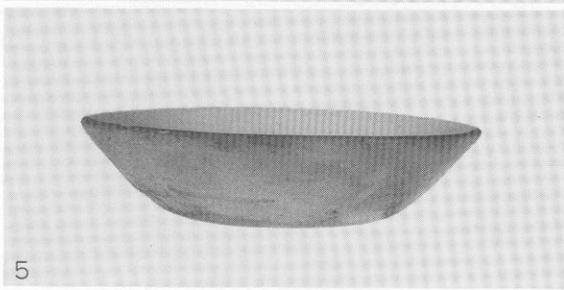
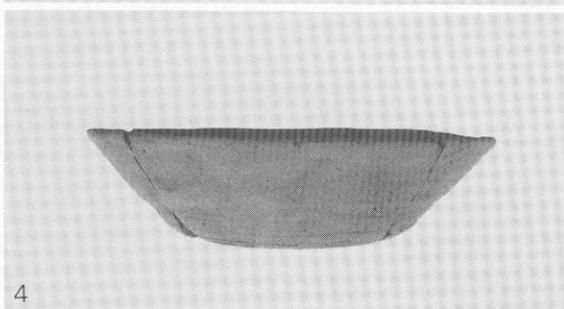
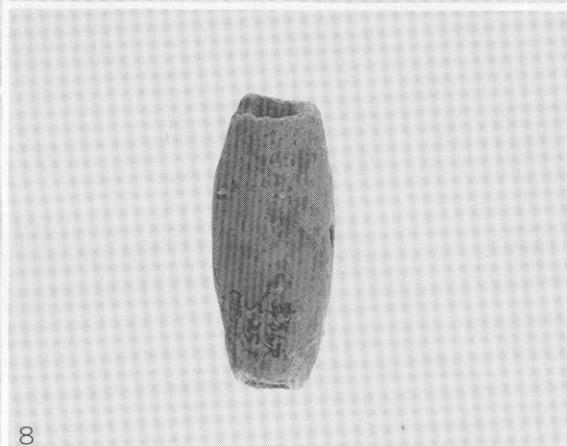
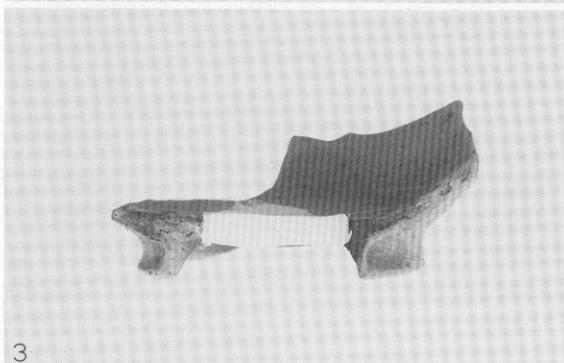
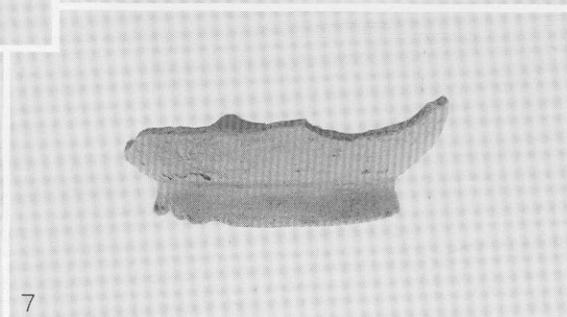
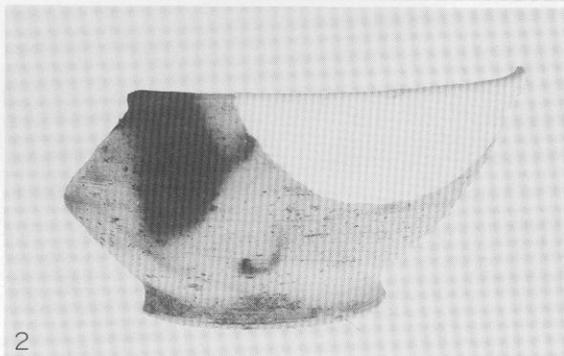
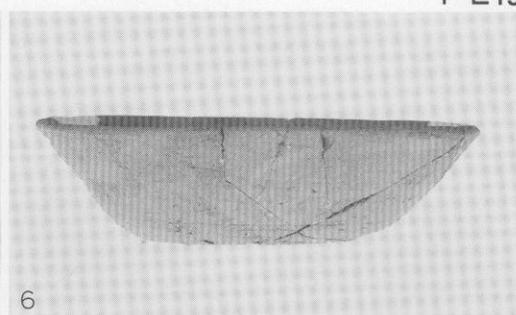
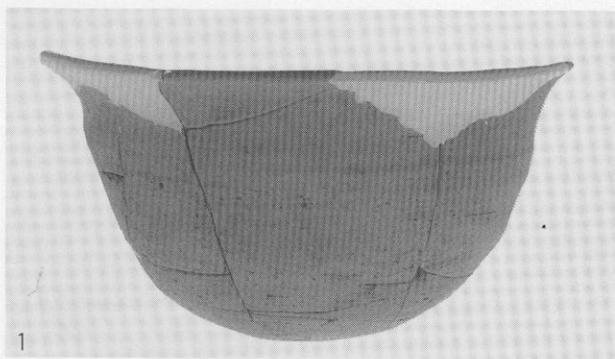


S E 01出土遺物(2) 5 ~ 7 (瓦)

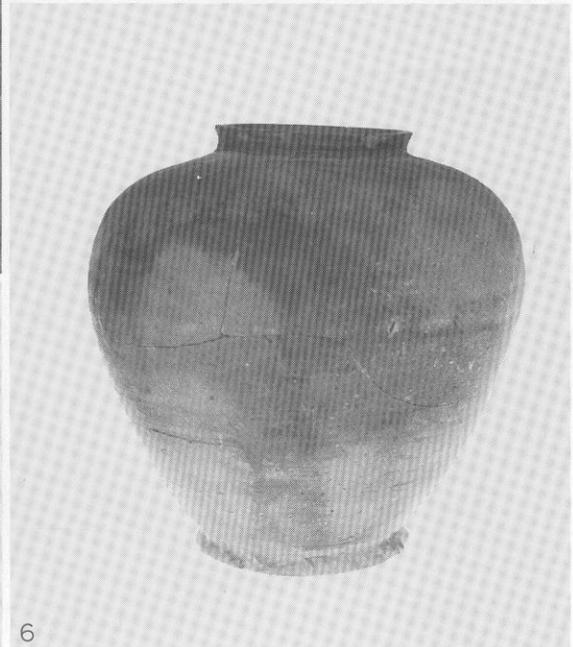
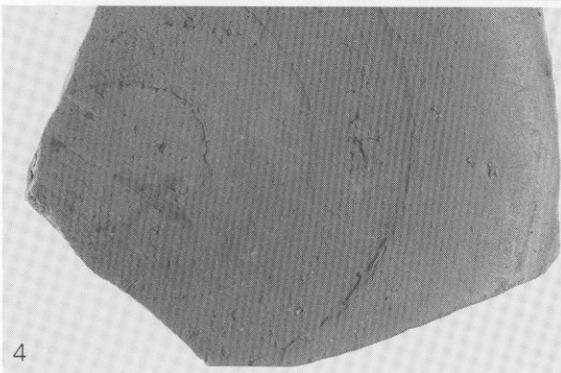
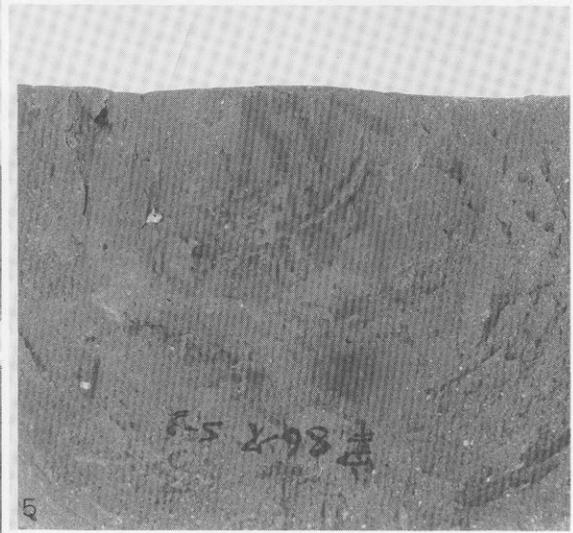
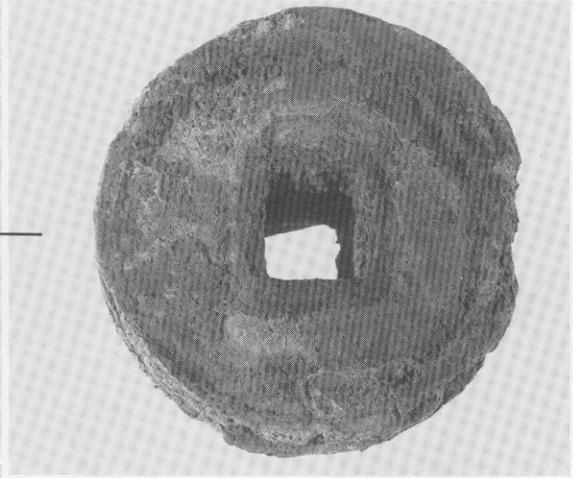
PL12



S E 01出土遺物(3) 瓦



S E02, S X01出土遺物 1 ~ 8 (S E02) 9 (S X01)



古銭 (1)墨書土器 (2~5) 資料紹介土器(6)

大宰府条坊跡

第86次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

第27集

発行 筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印刷 株式会社川島弘文社
福岡市東区箱崎3-頭6丁目6-41